
出口のない考察

佐藤 弘貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出口のない考察

【Nコード】

N9900I

【作者名】

佐藤 弘貴

【あらすじ】

1話読み切りで連載致しております。書き方もバラバラですが、そこも楽しんでいただけたら幸いです。

第1話【赤いダイヤ】妖艶に輝き、人々を魅了する赤いダイヤのお話。

第2話【道しるべ】人々の織りなす軌跡という名の線のお話。

第3話【今と嘘】何が今で何が嘘か。今を分析するお話。

第4話【たとえ君と師走】すぐに何かに例えようとするたとえ君の

お話。

第5話【喜びの果て】私は不幸だ、ついていないと嘆く男のお話。

第6話【物を考える〜1〜】10円玉を目の前にして運命を考えるお話。

第7話【ウツクシヒト】美しい人のお話。

第8話【弱者に送る言葉。】弱い人たちへ送る言葉。

第9話【クリスマスの楽しみ方】どのようにクリスマスを楽しもうかというお話。

第10話【人の夢。それは儚い。】今も忘れられない夢のお話。

第11話【青春の宝箱。】実際にあった高校時代のお話。

第12話【広がる世界に取り残されるな。】広がる宇宙とインターネットのお話。

第13話【強者に送る言葉。】強い人たちへ送る言葉。

第14話【雲の早駆け。】雲を見上げると、こみ上げてくる思いのお話。

第15話【鋼鉄のラブレター。】固い愛情。その決意のお話。

第16話【やまない雨。IN パラレルワールド サトシ。】孤児院・星空園でのお話。

第17話【世界が教えてくれること。】世界に広がる魔法のお話。

第18話【真実。】この世界の真実を考えるお話。

第19話【三つの塊の物語。】三つの塊のお話。

第20話【たとえ君と政治。】以前紹介した「たとえ君」のお話。

第21話【朱夏。】青春の後に広がる、あかい夏のお話。

第22話【クロムハート。】強い心のお話。

第23話【素直になれたら。】素直な心に羨望するお話。

第24話【僕の緑と君の赤。】観たい映画で喧嘩になる二人のお話。

第25話【眠らない者たちへ。】午前二時。起きているあなたに贈るお話。

第26話【世界の終わり。その一例。】世界の終わりのお話。

第27話【創造の森。】暗い森の中での自問自答のお話。

第1話「赤いダイヤ」(前書き)

とある人、あるいは物から見た世界を一話読み切りにてお送りしております。皆様の目に、もう一つの目を加えていただいたり。あるいは何かをお探し中の地図がわりにしていただけたら幸いです。想うところがあれば感想などを頂けたら、非常に喜びます。よろしくお願い致します。

第1話「赤いダイヤ」

その美しいダイヤは、深い赤。長い歴史の中で、様々な所有者の血によって赤く染められた・・・そんな想像に直結するような深い赤。凜とし、触れるのも躊躇われるその姿は人々を魅了する。

ゴシップも流れる。呪いのダイヤだ。血塗られた歴史だ。あれの所有者は不幸になると。

だが、私は知っている。彼女には意志があつて、彼女自身が所有者を選びながら旅をしているのだ。信じられない？それでいい。ただ、それは彼女にとってあまりに自然な側面に過ぎない。それだけの話なのだ。

ヒロイックな彼女は、所有者たちのもとで自身の血を流す。それを感じた人々は、より彼女に魅かれ自ら血を流し始める。それでも彼女は飽きれば去っていく。それも自然なこと。すべての人々は、彼女の中の登場人物に過ぎないのだ。

最初にその価値に気付き、彼女を手にしたその時から、私はずっと生き続け、演じ続けている。最初は彼女を慕う恋人。そしてそれは愛人になり。時には彼女を奪い去る盗人。彼女の歴史をライトアップする予言者。傷ついた彼女を手当てする医師。再会した恋人。

ただ、最初に彼女が見せた透明な涙が忘れられなくて。その感情の嵐にまた身を委ねたくて私はここにいます。これからまた、何百年何千年と。彼女のストーリーの中で立派に演じ続けるのだろ。あの、もう決して見られない、本物の涙を見るまでは。

まさしく半永久的な彼女の美貌の前で、時間や金銭の価値の無さ
と言ったら・・・。

第1話「赤いダイヤ」(後書き)

いかがでしたでしょうか？この空間に散りばめられた何かを感じ取っていただけたら幸いです。できうる限り毎週一話更新する予定です。ですのでよろしくお願いいたします。

第2話【道しるべ】

人の生活とは、すなわち点。そしてそれは、時間という筆を通して線になる。

もはやこの景色は人の線によって塗りつぶされている。全種類の色鉛筆で書きなぐられたカオスな世界。それでも、目を引くものもある。ほんの少し大げさな色合いで塗りつぶされたエリア。そこではきつと、旅人が立ち止り涙を流したに違いない。俺なら、私なら・・・。

映画、マンガ、ドラマに小説。そんな影響だろうか？あまりにも可能性のない道を意気揚々と進むものがあるのは・・・。ほら、今まさに歩きにくそうな道を選ぶものがそこに。目をギラギラさせて九分九厘不可能な道を歩き始めている。歩くがいい。結果を求めないでいられるのならば。

ふと他に目をやれば、ボールペンを紙の一点に押し付けた様に、暗いエリアを作り上げるものもある。暗くてよく見えない。その眼差しが。その意志が。彼の歩いてきた道もだいたい絡めとられてしまつて、なかなか見出すのは容易ではないな。

それでも少し引つ張つてみるか・・・。いや、やめよう。それが真っ直ぐな線だろうと、所々ドラマチックに輝き絡まった道だろうと、今の彼がいるエリアはそこなのだ。

また、不可能な道を歩む彼に目をやる。・・・ほうら見る。大きく転んだぞ。そうら見る。立ち止まったままだ・・・。

そもそも、その線はいつか平等に途切れるのだ。天に昇るでもな

く、地に潜り込むでもなく、いつかふつと。音もなく。ただ選んだ道しるべの指す線を辿って、わずかな形になるだけだ。

おや？暗い彼のエリアがほんの少し明るくなったか。闇夜でライターを灯したように、ほんのわずかではあるが。・・・なるほど。人に泣きついたか。手に入れた小さな哲学は歩かせてくれそうか？できるなら歩くがいい。でなければそこからは出られない。そこには道しるべすらないのだから。ライターなんてものはすぐ消えてしまっぞ？さあ、どうする。・・・だろうな。その光ではそんなものだ。

ほう・・・色々な線が集まってきたか。なかなか君は運がいい。君が歩きたいと願えば・・・いや、飛びたいと思えば飛ぶこともできそうだぞ？思い描いていることが九分九厘不可能でも、そこにいるよりはましだと思うがな。・・・ほら。さっき大きく転んだ彼も、もう歩き始めている。君はどうする。生きてるんだったら、そこから出てみる！

私は気まぐれな身だ。1厘がそこかしこに落ちているぞ。その暗い点を、君が自身のアートの一部にして見せるところも意外と期待しているんだがなあ・・・。

第3話【今と嘘】

どこにある？と聞かれれば間違いなくここにある。だが、そのここも一瞬で今ではなくなるものだ。当然。だが納得できない。それが今というものだろう。

拳を握ろう。握れる。少し歩こう。歩ける。しかし、一旦その構造を機械的に考え出すと途端にぎこちなくなる。今までが嘘であつたかのように。

僕はどこ？俺はここ。私は昨日。君は未来。

暗くなつた空を見上げる。そこに星はある。だが、厳密に言つとそれは今そこにはない。何十年、何百年前の光たち。それは嘘？だが本当。今見えている。

突然こみ上げる痛み。うずく傷。それは誰？昔の自分。今の痛みではない。でも、今まさに痛い。嘘ではないのだ。

涙。今落ちる。この目から落ちた。証明できるか？もう、できない。既に今は泣いていない。

また、空を見上げる。やはり星はある。眼球が捉え、脳が感知する。ほんの少しの誤差。じゃあ、君も今の君ではない。ああ、そう。僕も。僕もだ。

今ここにいる？いや、確かにいる。それでも疑う。やはりいる。今ここにいる。疑っている自分が。デカルトはそう言ったわけだ。

僕はここにいない。嘘をつく。笑う。泣く。やはりここにいる。だが、今はまた証明ができない。それは今じゃないから。

君が亡くなった。聞かなければそうじゃなかった。確認しなければ本当ではなかった。だが、今君はいない。それが今。

でも、僕はここにいる。君はもういない。それでも極端に言えば、君はいる。残りカスとなって、重い石の下。

僕にはわからない。君がいるのかいないのか。いるとは思いたい。が、どちらかと言うとしないのだろう。

また空を見上げる。そこに君はいないらしい。涙はここにある。君はいないながら、君は僕を泣かす。

毛布にくるまる。暖かい。でも君はいない。それがどうやら本当だ。

目を閉じる。さっき見た星空が目に見えなくなる。君もそこにいない。簡単に思い出せる。今、思い出せる。でも、それは今じゃない。

一秒前の自分を否定できない自分は、今の自分じゃない。それは、一秒前の自分だ。

怖くない。言い聞かせる。つまりは怖い。時計の針は1秒ごとに小さな音を立てる。すぐに今は今じゃなくなる。

それでも今怖い。今痛い。今また涙がこぼれる。共に歩む今じゃなくなつたから。

だからそれでいい。怖くていい。嘘じゃないから。

僕はいる。ここにいます。今。

第4話「たとえ君と師走。」

私の同僚に「たとえ君」というあだ名の友人がいる。物事をなんでもたとえたがるのでそのあだ名がついた。というか私がそう名付け、私しか呼んではないが。

今日も彼と仕事と一緒にだったので、いじりかきませることにする。

「やあ、たとえ君。12月になったが、調子はどうだい？」

取り留めもない会話を投げかけてみる。

「そうさなあ。世間は不況で仕事がないやら暇だと嘆いているが。僕にしてみると、やはり12月は師走だね。たとえるなら、コルサコフ君の熊蜂の飛行のようだね。」

そらきた。今回はクラシック音楽をたとえに引き出したようだ。その曲は知らないが、彼は音楽家の名前を君付けで呼ぶ習性があるので恐らくそうだろう。もっとも、以前

『きらきら星』の作者をすぎやまこういちさんと嘘をついたところ、えらく感心していた様子を見せたところから、あまり信用はしていない。

「熊蜂の飛行？それはどういった曲なんだい？」

今日は少し掘り下げてみよう。

「あれは、せわしく動き回る熊蜂の生態を見事に表現した曲なのだよ。」

「熊蜂の生態ね……。どんな様子なのだろう。もっと詳しく聞かせてくれよ。」

しばしたとえ君は考える。

「うん、そうさなあ。たとえるならば、バーゲンセールになだれ込む人間のようにせわしいといったところか。」

「なるほど。蜂はもつと優雅なものかと思っていたがな。バーゲンセールね。」

「いやいや、動物はせわしないのさ。バーゲンセールもたとえるならば、あれは戦国の戦のようではないか。」

「戦国の戦？またそれは話が飛んだね。」

たとえ君はまた考え始める。

「いや、つまりたとえるならば、イモ洗いのようにこつた返す、真夏のプールのようなだということさ。」

「ほう、真夏のプールか。ではまとめると、この寒い中君は真夏のプールにいるような感じというわけだな？」

たとえ君は困惑してみせる。

「ちょっと待ってくれ。」

だいぶ考えこんでしまった。この時間を利用して、仕事に集中することにしよう。ブツブツと独り言をこぼすたとえ君。時折向けられる他の同僚たちの視線は気にならない

らしい。たとえ君の集中力は果てしないのだ。頑張れ、たとえ君。

と、しばらく時間が経って、笑顔のたとえ君がこちらを見ていることに気づく。

「おつ。なにか思いついた様子だな。」

僕も仕事の手を緩め、声をかける。

「ああ、つまり僕が言いたかったのはだ。両極端にあるものは似た性質を持つということさ。」

「ん？詳しい説明を要求しよう。」

「ああ、そうさなあ。たとえるならば、人の表情だ。ものすごく笑ったときと大泣きしているとき、しわくちゃで似た顔になるだろう？」

「うーん。まあ、そうと言えなくもないな。」

「だから僕は、12月に真夏の話を取り入れたわけだ。寒いのもいやだが、暑いのもきついもんだ。人間、適度なものが一番だ。たとえるならば、鍋やアイスではなく普通の白い飯が一番だということさ。」

自信たっぷりに言い放ったが、いよいよおかしくなってきたぞ。

「おいおい。じゃあ、結局君の12月はどんな様子なんだい？」

「そうさなあ。ま、たとえるなら何かいやな感じってことさ。」

「それはたとえじゃない。」

私が冷たく言い放つと同時に、休憩のベルがなる。実はたったこれだけの会話の間に、4時間もの時間を要していた。たとえ君は、熟考し始めると止まらないのだ。この集中力が仕事に向いてしまうと、いつも定時より早く現場が終わってしまい、こちらの給料も減る程だ。ま、だから前半はこうして考えさせることにしているのだが。

「君のつつこみは、相変わらず熊蜂のようだな。」

お弁当を広げながら、たとえ君はつぶやく。

「それは、するどいつてことかい？」

「いや、たとえるならば、タンスの角に小指をぶつけたような鈍痛が襲うってことさ。」

「いいじゃないか。するどいつてことで。」

本当はここでも突っ込みたかったが、お昼はゆっくり楽しみたいのでやめておこう。午後もし事を終わらせるためにあの集中力の無駄遣いはやめよう。たとえ君は便利だ。非常に。

第5話「喜びの果て。」

ついてないな。私はぼつりとつぶやく。肩を落とし、天を仰ぐ。暗くなり始めた夜空には、一筋の流れ星。美しい。私の心をギュッと締め付ける。いや、本当についてない。

そんな今日の私は、いわゆるラッキーデイというやつだ。一般的には心が浮き、決して私のように肩を落とすことのないような。そんなについている日。

朝、馴染みのニュース番組。本日の私の星座の運勢は、1番に押されていた。うむ。嫌な予感が私を包む。チャンネルを回し、他のニュースに目をやる。そこでの私の名前の運勢は・・・ああ、ここでもまた1番。これはまずいことになった。藁にもすがるような気持ちで他のチャンネルに切り換える。・・・そうか、今日はまさに危険な日と言った方がよさそうだ。この番組でもまた1番。朝から随分縁起が悪い。好物のプリンをデザートに朝食を終え、重い体を引きずって家を後にする。

会社。私が勤めて七年になる安住の地では毎月『会社に貢献したヒーロー』を数名選出し表彰する習慣がある。これは、上司の推薦や最近ではエコ活動に熱心な社員から選ばれるものだ。・・・ああ、やはりついてないぞ。別段なんにもしていない私が選ばれている。同僚に『やったな!』『さすがですね!』なんて言葉を朝から浴びせられ、また体が重くなる。推薦してくれた部長の山崎氏が、こちらを見ながら微笑んでいる。いつも部下に厳しく自分に甘い山崎氏がだ。・・・うむ。背筋におかしな汗が一筋。

朝礼。先ほどの選出もあり、社長から表彰される。そして一言、

これからの抱負を求められる。どこかのマンガかドラマで聞いたような言葉を並べ、盛大な拍手を頂きながらもなんとかやり過ごす。金一封も手渡され、朝礼を終える。因みに金額は3万円。これをどう消費しようか。困ったものだ。

仕事場。今日中に仕上げる予定の仕事や、先方とのコンタクトを昼前に無難に済ませる。少し肩の力を抜こうと、職場の安物のコーヒーを入れていると、あの山崎氏が近づいてくる。

「ああ、先ほどの君の演説。なかなかだったじゃないか。」
張り付けたような笑顔が暑苦しい。

「いえ、その。部長の推薦あつてのことです。ありがとうございます。」

「いやいや、君には期待しているんだよ。」

「ありがとうございます。」

さらに山崎氏が近づき、小声になる。

「お礼を言いたいの私の方さ。ま、今度また一杯付き合ってくれたまえよ。」

「ああ、はい。是非。」

そうか。そう言えば2週間前、山崎氏を助けたのだ。あの日私は急に呼び出され、迷子の子供のように酷く狼狽している山崎氏の相談を受けたのだ。なんでも、妻に携帯を調べられ、それ以来浮気の疑いをかけられているとのことだった。そこで私は策を練りだし、4つほどの工作活動をこなし、その疑いを3日で解いてやったのだ。なるほど。この不可解な選出はそのためか。全く、現金な上司だ。私は本当についてない。

仕事場、午後。入社二年目の部下、恵が相談にやってくる。この若い女は人気があり、この部署だけでも4人の男が狙っている。二年目を迎え、ようやく社員として独り立ちをした感もあるのだが、少し困ったことがあると私に相談を持ちかけてくる。まあ、自分で

いうのもなんだが、私は人当たりがいい方ではある。怒るのも苦手だ。そういうところで、部下たちはしばしば相談相手に私を選ぶ。恵の案件は少し厄介なクレームで、その対応策を私から譲り受けたいというものだった。私は簡単なマニュアルを作成し、恵が電話を取る。15分の格闘後、私に助けを求める眼差しを向けてきたので引き継ぐ。なんとか10分後にはお客様のご理解を得、胸をなでおろす。

「ありがとうございます！いつも本当に助けられてばかりで・・・。

」

恵の丁寧なお礼。ああ、周りの視線が痛い。

「いやいや、ああいうお客様は難しいからね。誰でも困惑するさ。さ、仕事に戻りなさい。」

やっと恵を追い返すが、まだ4人の視線は痛々しい。

「おい、相変わらずお前は女に甘いな。」

その視線の主の一人、隣のデスクの荒木がつついてくる。

「別に。話がこじれても、僕の仕事が増えるだけだからな。何事も先回りだよ。」

「要領のいいことで。」

精いっぱい笑顔で皮肉をたれる荒木だが、目は笑っていない。だからお前は駄目なんだ。隠れてため息をつく。

仕事場、帰宅30分前。先ほどのお礼とばかりに、恵がコーヒーを入れて持ってくる。

「ミルクはなくていいんですね？」

「ああ、良く覚えてるね。ありがとう。そんな気を遣わなくてもいいのに。」

「いえいえ。先輩方のコーヒーの好みを覚えるのも仕事ですから。」
そう言いながら、コーヒーとともに一枚の紙切れをそつと置いていく。

『明日、空いてますか？今日のお礼もしたので、よかつたら食事でもいかがですか？知り合いが素敵なバーに就職したので、是非紹介もしたいので。時間と場所は・・・』

手紙とは、また古風な。メールで済ませばいいだろうに。ま、こういう手間をかけるのが女性は好きなのだろう。こちらをチラチラ見ている恵に目をやり、軽く頷いて見せる。ああ、本当についてない。人気のある女に目をつけられると、色々面倒だというのに。

会社を出て、重いため息をつく。ああ、本当についてない。欲しくもない賞と重い期待を背負わされ、面倒な上司に気に入られ、人気のある女に目をつけられる。まったくこれから思いやられる。どうせこれから少しでも失敗すれば上司から見放され、同僚からは酷く笑われ、あの女も去っていくに違いない。はあ、私はなんて不幸なんだ。

手にした3万円を握りしめ、パチンコ屋に向かう。こうなったら、この忌々しいあぶく銭だけでも本当のあぶくにしなければ。

出ない回らないで有名なガラガラのパチンコ屋に入り、辺りを見渡す。会社から程良い距離にあることもあり、時折この店にくるのだが、釘はガタガタ。客に勝たせるつもりは全くないといった感じの店だ。私はここで、ヘソ釘に球が詰まっている光景を3度見かけたことがある。ここなら簡単に3万くらいは飛んでいきそうだ。

閉店間際まで打ち続け、店を出る。・・・ああ、私はなんてついてないんだ。こんな店でこんなに勝ってしまうなんて・・・。しかも早く手放したかったあぶく銭でだぞ？これはいよいよ危険だと思っただ方がいいな。手にした戦利品、7万円を財布にしまつて、とぼとぼと家路につく。天を仰げば一筋の流れ星。はあ。ついてないついてない。

帰宅して軽食を取り風呂に入る。湯船につかりながら、これからの不安に思いを巡らす。

「明日は恵と食事。きつとつまらない私に落胆して、あの綺麗な女は二度と私には近づくまい。あ、明後日は確か・・・私が一口馬主で投資している馬が二頭G1レースに出走する日だったな。二頭とも随分人気を集めているが、きつとずぶずぶに惨敗するに違いない。勝てば大金が手に入るが、期待は禁物だ。下手したら故障だってあり得るのだから・・・。」

憂鬱になり、風呂を出て新聞に目を通す。毎日何気なく目を通している株の一面に目をやる。おや、以前知り合いに勧められて100万程投資した株が随分と好調じゃないか。この不況の中やってくれる。私を更に不幸にしたいというのか？これでは200万程得をしてしまうではないか。このままでは駄目人間まっしぐらだな。くわばらくわばら・・・。こんな不吉なものは、ネットで早々と売り払ってしまったおう。これ以上変な得をしないように・・・。

ベットにもぐりこみ、しばし今日の不幸を数える。喜びの果てには必ず不幸が待っているものなのだ。不幸の先にはさらなる不幸が待っている癖に・・・。理不尽な世の中だ。私は浮かれないぞ。不幸の果ては遠いが、喜びの果てはいつも近くにある。いや、今日の私は本当についてなかった。困ったものだ・・・。こうなったら、是非つい流されて買ってしまった年末の宝くじだけは外れてもらわなければ・・・。今回も当たってしまったら、3年連続になつてしまふぞ。

眠りに落ちる少し手前、ようやく私はほくそ笑む。ああ、明日も不幸よ来い来い。今日もいい夢が見れてしまいそうだなあ・・・。ふふふ・・・。はっはっは！！

一人で暮らすには広すぎる、都内の地上15階、庭付きバルコニーが自慢の4LDKマンションに、私の笑い声が響き渡る。

第6話「物を考える〜1〜」

時に世界は小さなものに支配される。あまりに広大な空間においても、それを無意識に大きな運命へと導くものがあるのだ。それは時代を遡れば生命の誕生であり、遺伝子の形成であり、その小さなコピーのミスの繰り返しであると言える。

ただ、その原因となりうるものを特定するのは難しい。単に運命がそういう方向に転んでいったと言えないのである。

想像してほしい。ここになんの変哲もない10円玉があるとする。これが数秒後、地面に落ちるとしよう。もし、この10円玉が世界を大きく変えるものになるとしたら、それは一体どんな音を立て、どこに落ちるというのだろう。音もなく絨毯の上に落ちるのか、ワイングラスの中で乾いた音を立てるのか。それは解らない。ただ、世界や運命というのは、そう言った小さく普遍的なものがしばしば動かしてしまうものなのだ。僕らの気付かないうちに。

良く生きたい。うまくすり抜けたり、押し返したり。逃げたり立ち向かったり。そう思う。それでも小さな運命の歯車はしばしば自分のすぐ傍で生きていて、その体に似合わず大きく何かを変えようとする。だから、どんなに従順に生きていてもそのことで悪人になるかもしれないし、逆に自分の汚い部分が人を救ったりもするものなのだ。

そう考えると、どうやって生きていけばいいのかと考える。今まさに10円玉を握りしめ、それを床に落としてみてもそれは何も変えてはくれない。そして予期せぬ時に何兆かそれ以上の確率をかい潜って、その10円玉は世界を変えてしまうのだ。

かと言って、諦めたくはない。どうやっても自分の運命を自分で進んでいきたいと考える。そして作り上げる。自分の目標や夢を。自身の未来に目印を突き立て、儚く散りゆく事を覚悟しながら、それでも進むのだ。物を知り言葉を操り経験し想像する。そうして一秒一秒を進むのだ。決してただやり過ごさぬよう。

10円玉を見つめながらただそう思う。ただの10円玉で、僕はここまで飛ぶこともできる。少し、不便でもあるが。

小さなものにも動かされる儚い運命だからこそ、その恐怖をちゃんと知った上で決断する。回りくどいようで、決めた自分に責任を持つ。それを愛しく思う。こうしてまた一つ、物を考える。

さあ、次は何を考えようか。

第7話【ウツクシヒト】

何をもって、どのように美しいかということ。見た目なのか心なのか。それとも言葉なのか考えていることなのか。世の中にはウツクシヒトが溢れている。ヒトは大抵毎日

鏡の前に立ち、自分を確かめる。髪。毛。体。目。服装。心。ヒトは美しさに敏感なのだ。クジャクよりもずっと。ずっと。

ある日、モデルの様に美しい見た目の女性が駅にいた。言うまでもなく、彼女はウツクシヒト。通り過ぎる男たちは、その美貌に遠慮がちに目を向け、そして怯え逃げる。

凜とした姿勢は自身を確立しているようにも見え、それがまたそのウツクシヒトの神々しさを強く演出している。

しかし、私は考える。彼女の心の中はどうか？あの美貌とその見せ方を知っている女性だ。今までその力で男達に崇められ、我がままに育ってきた可能性も強い。あ

るいは、何かしらのコンプレックスを隠すために着飾っているとも考えられる。実は心の中は散らかり放題で、電源を切って半年放置した冷蔵庫の様なおぞましいものかもしれない。

れない。そうなるともう、他のウツクシヒトに対してはニヒリストにしかかなりえないような女性であるに違いないな。

・・・などと、勝手な想像をしてみる。まあ、そんなエピソード

を付け加えなければ天秤のバランスが取れない程の外見ウツクシヒトだというわけだ。

しばらく待つと、電車がやってくる。幸い空席があつたので、その外見ウツクシヒトも私も静かに座る。

なるほど、座っても気を抜かないというわけか。背もたれに身を預けることなく、シャンとした姿勢を保ち、目も静寂を保ちながらも生きている。存在だけで絵になる女性

というものもあるものなのだ。

だが、そうなるとますます怪しい。ここまで自身を知りつくし、作り上げている点からは、心を強く持たなければすぐにでも崩れてしまうような脆ささえ感じ取れるではな

いか。もしかしたら、かなり危険な人物かもしれないぞ。人を殺して逃亡中の美人殺人犯か？もしくは国家レベルの機密を保持していて、それをばらしたら殺されてしまう身

なのかもしれない。あるいは、彼女には二人の妹がいて、夜な夜な三姉妹で泥棒行為をしていることもありうる（いや、これはない。）

そうしている間にも、電車は停車の度に満腹に近づいていった。微動だにしないウツクシヒトは、時折外や腕時計に目をやったりしながらも、その美しさを壊すことをしないでいる。私は勝手な想像で、なんとかその美しさを天秤の端に、真ん中に一般の人間を置き、それがバランスを取れるように彼女に悪い価値を与えようとする。

今思うと、しかめっ面で座っている私は、かなり異質な雰囲気を放っていたかもしれない。だが、そうせざるを得ない程のウツクシ

ヒトであるということ、そこは許してほしい。

電車は都心に向かって何も変わったこともなく進む。相変わらず私はしかめっ面で考え込んでいるのだが、ふと気がつく、よぼよぼのお婆さんが乗車して来る。

私もまだ三十路手前の男だ。これは席を譲ることにしようか。いや、待てよ？もし席を立つて、断られたらどうしたものか。「あたしはまだ元気だよ！シルバー扱いは止めとくれ！」なんて言われた日には、その気まずさにおかしな事を口走ってしまいそうだぞ？・よし、もしそんなことを言われたらこう言おう。「シルバーだなんてとんでもない。レディースファーストですよ。」・・・うむ。なかなかいいではないか。これならお婆さんも喜んで座ってくれるし、私のこの電車内での株も上がるってもんだ。

と、俯いていた頭を上げ今にも立ち上がろうとすると、そのウツクシヒトが立っていた。

「よかつたらどうぞ。」

その所作も、言葉も美しい。あら、悪いわね。とお婆さんは言うて、嬉しそうに座る。

なんてことだ。彼女は本当にウツクシヒトであった。外見だけではなく、心も言葉も綺麗ではないか。それに引き換え私ときたら・・・。彼女に対して皮肉たっぷりの考えしか持てず、変な恐怖心から席も譲れなかつたわけだ。しかも、席を譲る際に自分の株まで上げようとは、なんたることか。

世の中にはいるのだ。ウツクシヒトが。勝手に殺人犯やらキャッ

ツアイにしまつてごめんなさい。ウツクシヒトに・・・乾杯。

その日、帰宅後には少し難しい本でも読もうと誓ったが、お笑い番組を見てる間にソファで眠りこけてしまった。私にとって、ウツクシヒトは遠い様である。

第7話「ウツクシヒト」（後書き）

実際にこんな方は見かけたことはありません。でも、席を譲ろうと思って変に考え込んでいる間に先を越されてしまったことはあります。一人で赤面した、切ない想い出です。

第8話「弱者に送る言葉。」

「頑張つて」という無責任な言葉に、今日傷ついた人たちへ。

「なぜ？」という疑問の目に、自信を無くした人たちへ。

「戦えよ！」という圧迫に、逃げ道を失った人たちへ。

僕は言わない。僕は問いかけない。僕は強制しない。そのかわり、
一歩だけ逃げて欲しい。その勇氣だけが必要なんだ。

さあ、どこまでも逃げよう。誰もいない場所でもいい。自分の部
屋の中でもいい。ただ、逃げ続けよう。

大丈夫。日本は割と優しい。なんとか生きてはいけるさ。その分、
逃げるんだ。どこまでも。

もう、充分苦しんだ。だが、どこへ行っても苦しいものだ。どこ
にでも落ちている。悲しみも苦しみも。

そいつらに見つかったらまた逃げよう。どこまでも逃げよう。ど
こまでも。

ただ、そこにもきつとある。美しいものが。今の君には見えなく
ていい。見えなくていいんだ。

全ては時間が解決してくれる。どう生きても君は歳を取る。ちゃ
んとそうできているんだ。

だからいつか、それが見えればいい。それまでは逃げ続けられ
いい。何も悪いことじゃない。

僕は許そう。その今迷っていることから逃げる事を。だから、君
も君を許してやってほしい。どうか。許してやってほしい。

もし、許せるのなら。子供の様に泣こうじゃないか。弱弱しく、

今ここで泣いていると。子供の様に泣こうじゃないか。

その代わり、ともかく生きようじゃないか。

頑張らなくていい。その代わりに頑張らない自分を許そう。

自信なんて必要ない。その代わりに自分を可愛がろう。

戦わなくていい。その代わり思いっきり逃げよう。

腕を傷つけてもいい。その代わり薬は処方された通りにね。

目を閉じて、何も見えなくなってしまう前に。

どこまでも逃げよう。

皆、本当に沢山の皆が今逃げている。

何も恥ずかしい事じゃない。

逃げよう。泣こう。社会のせいになよう。

勝手に立ち上がるまでは、沈んでしまおう。

本当に自分で息を吸いたくなるまで。沈没船の様に海底で眠ろう。

第8話「弱者に送る言葉。」（後書き）

人は際限なく傷ついていく。それが悲しい。でも、傷も影もない人間なんて、魅力の欠片もないのです。そして、そんな人間はきつといたないのである。

第9話「クリスマスの楽しみ方」

さ、今年も一人でクリスマス。硬派な私は、浮かれたりはいしません。ええ。もちろん独り身ですし。ま、いいんじゃないんですか？町の若者たちが楽しんでいる分には。この不況の中。存分に楽しむがいい！！私はホッケを焼く。じっくりしつかりと焼きます。だいたい、クリスマスだ正月だと、その時にしか食べないものは、料理しなれてないからうまく作れないものだ。だから焼きます。ホッケは私を裏切らない。

とはいえ、一応めでたい日らしいので私も何かを楽しもうとは思う。ホッケを焼いて食べてお腹いっぱいってのも芸がない。

よし、色々とリストアップしてみようじゃないか！

クリスマスを楽しもう！

クリスマスと言えば、やはり美しいイルミネーション。これくらいは、独り身の私でも楽しみたいものだ。だが、一人でイルミネーションの前でボーっとするのはなかなか切ない。というか危ない。だいたい、私は人混みが嫌いだ。電車などはまあ、慣れたものだが（あんまり人が動かないし。）
そうだ！こんなのはどうだろう？

1・山手線を何周しよう！

車窓からはその町々のイルミネーション。山の手線は大体都会を走っているし、これは使えるに違いない！一番前の車両で、空いた

席に乗り込み、優雅に何周も！寒くないしお金も使わない。これはかなりいい！

さ、イルミネーションを十分楽しんだ所で、今度はどうしたものか？ホツケはもう焼いてある。いつでもチンすれば食べれる状態だ。そうだなあ、自分で自分にプレゼントを買うのは忍びないが、日ごろのご褒美ということで自身を甘やかすのも悪くない。

2・さあ、買い物だ！

山手線に乗ろうと、都合よく都心まで来ているはずだ。これは買い物する場所も山ほどあるわけだ。そうだなあ・・・洋服もいいが、たまにはゲームなんかもいいかもしれないなあ。おつ。ケーキが安く売られているじゃないか！そうそう、イベントの時間も半ばを迎えると、売れ残りを避けようと安くなるものなのだ。よし、なにか面白そうなゲームと安いケーキを買っていこうじゃないか。

よし。かなりクリスマスらしくなってくるんじゃないか！私もやればできるものだ。このテンションでは、都会の真ん中で『メリークリスマス！』と叫んでしまいそうだ

。いや、それはやめよう。さて、あと何かできるものはあるだろうか？うーん。あとはサンタ関連の何かがあって欲しいものだな。街中を見渡すと、確かにサンタらしき格好の人々が溢れているが、皆安い時給のアルバイトかなんかであろう。もっと奉仕する意欲のあるサンタと絡みたいものだ。

3・そうだ！キャバクラ行こう！！

そうそう、こういうイベントには完全に絡んでいるに違いない！
独身貴族を気取っているわけだし、こういう場所で楽しくワイワイ
つてのもいいかもしれない。ま、もつともキャバ嬢たちは、こうい
う日に働いている自分に嫌気がさしているに違いないが。それでも
パーティーはパーティーだ。ケーキも買って行ってやれば喜ぶかも
しれない。

ただ、時間は今18時。もうしばらく時間潰しが必要だ。

4・そうだ！パチンコ行こう！！

これはいいぞ。まさにお祭り気分じゃないか！フイバーに次ぐ
フイバーで大盛り上がり！店員さんのマイクも絶好調！！財布か
ら出ていくお金も絶好調！！・・・いやいや、それはいかん。

よくよくこの計画を考えると、完全に踊らされている気がする。
る。やはり、独り身は独り身らしくグツタリしているのが一番なの
かもしれない。

ただ、キャバクラだけは行こう。硬派な私も寂しい時は寂しいの
だ。

では皆さま。メリークリスマス！・・・ホツケが焼けた。

第9話【クリスマスの楽しみ方】（後書き）

実際、ホツケは焼きました。キャバクラにはいきませんでした。

第10話【人の夢。それは儚い。】

沢山の物事を経験し、深く知れば知るほどに今ここにいる自分の存在が危うくなっていく。宇宙の始まり。地球の歴史。生命の誕生。人が歩んできた道。そして僕。

それでも、綺麗な音楽に耳を傾けたり。楽しいTVに釘づけになり大いに笑ったり。時にはわけもなく泣いたりすることで、なんとか自身の存在に理由づけしている。

古い夢を思い出した。それほど大きくない山。その開けた丘と草原。静かに回る水車小屋。そこに美しく佇む少女。白いワンピースを風に揺らしながら空を見上げている。歳は10代半ばといったところか。だが歳の差は感じない。きっと、そこでの僕もそれくらいの年齢なのだろう。

「ねえ見て。あると思う？ないと思う？」

悪戯っぽく笑いながら空を指差す。指の先に見えるのは、乾いた空と真昼の月。

「何があるって？空と月なら見えるけど。」

「違うよ。星だよ。今は空しか見えないけれど、実際には満天の星空があるはずなの。」

視線は遠くへそそがれる。僕もその視線を追う。

「ああ、ならあるんじゃないかな。夜になれば見えてくるよ。きっと

と。」

「それじゃ駄目。」

頬を少し膨らませながら、僕を睨みつける。僕は少し怖気づく。

「何が駄目なの？」

「それじゃ駄目。今あるかどうかが大事なの。」

「今は見えないよ。地球の大気と太陽が邪魔してるんだ。」

「意地悪だね。見えなくしちゃうなんて。」

しばらく空を見上げながら僕は考え込む。宇宙は重力が支配していて、3Dに見えているものも実は9Dくらいまでであるという説を思い出す。空が持つ見えない重力の中で、6Dの物は折りたたまれてしまっているらしいのだ。僕はそれを彼女に丁寧に説明する。

「そっか。じゃあ、見えなくていいや。」

「そう・・・なんで？」

「見えない物が沢山あるなんて、私たちみたいじゃない。見えない世界があるなんて、とても美しい。今は決して開けられない宝箱みたいだね。」

満面の笑みで口を動かすので、僕はやはり怖気づく。彼女の一挙手一投足に僕は恐怖する。今にも消えてしまいそうなほど、彼女が遠くを見ているから。

「宝箱は、どうやったら開くのかな？」

なんとか言葉を零す。

「全ての謎は、時間が解いてくれるよ。私たちの知らない遠い未来に。きっと。」

彼女の目が更に遠くを見つめる。僕は泣きそうになる。もう、彼女はここにいない。いや、元からいないのだ。これは夢なんだから。

「ねえ、私、もうすぐ消えちゃうのかな。この風景とともに。」

「・・・いやだ。いやだよ！」

「でも、現実はこちらじゃない。そうでしょ？」

優しく微笑む。

「なら、僕は目を開けない！ここにいるんだ！！」

目が熱を持ち、大粒の涙が風に散っていく。心地よい風。草の匂い。美しい笑顔。静かな水車の音。それでも、ここは違うのだろうか。

「いいな。あなたは見れて。本当の事が。」

「なら、君も一緒に見ればいい！！ここから逃げ出して見ればいいんだ！！」

「意地悪だね。空や太陽よりも意地悪。」

悲しそうな顔を見せる。今日初めて見た夢のはずなのに、何故こんなにも親しい感情と懐かしさがこみ上げるのだろうか。

「ありがとう。君が見せてくれるんだよ。この風景も。太陽も空も見えない星も。」

「何言ってるの？ここにちゃんとあるじゃないか！」

「またここに来て。沢山の事を学んで、幸せも痛みも両手一杯に持つて。」

「もう一度ここに来れるとは限らないじゃないか！！」

「さ、目を開けて。」

「いやだ！君が消えてしまう！！」

「目を閉じれば、いつでも会えるから。」

どんなに抵抗しても、目は覚めてしまった。その瞬間に、匂いも風景も記憶の中で色あせて、枕に溜まった涙だけが目の前に残る。

儚い。・・・何故こんなにも儚い物がこの世に存在するのだろうか。・・・存在するのか存在しないのか。どちらかといえば存在しない彼女。なら、何故こんなにも愛しく懐かしい感情を彼女に対して持たなければならぬのだろう。

ふと、夜明け前の空を見上げる。星が自身の存在を主張する様にこちらを見ている。何十年、何百年前の光たち。・・・儚い。

本当に儚いのは、僕かもしれない。広大な宇宙の中で。137億年とも言われる歴史の中で。こんなにも小さな僕は、一つの点にすらなれないでいる。

それでも、僕はここにいる。こんなにも儚い僕はここにいる。それなら、あの儚い夢の中の彼女もやはり、どちらかと言えばいるのかもしれない。

少し、軽くなった。

第10話「人の夢。それは儚い。」（後書き）

この夢は今でも忘れられません。時折、走馬灯のように頭を一瞬で駆け巡ります。動揺します。とても。

第11話【青春の宝箱】

もう10年前になる。10年前の冬。高校卒業が間近に迫った寒い朝。武蔵小金井の駅の前で友達を待っていた名も知らぬ君に、ヴァンヘイレンのCDと汚い字の手紙を渡したのは僕だ。なにも実らなかったけれど。それでもあれは青春だった。

中学3年。高校受験を目標に塾に通い続けた集大成がもうすぐ見える時期。僕には勉強する動機がなかった。それでも勉強をした。なんとなく。しているふりをしていた。

きつと受からないと言われた高校に合格した。何も感情が生まれなかった。周りののはしゃいでいる友人たちとの距離を感じた。

高校1年。家から1時間半の通学時間と満員電車。目標のない学園生活。何かが折れた。1週間に1日は学校を休んでいた。成績はクラスでブービー賞。それでも危機感も悔しさもなく、魂は漂っていた。時間だけが過ぎていく感覚。

高校1年冬。このままでは留年か退学かという状況に追い込まれた。せめて満員電車だけは避けようと、いつもより1時間早く家を出た。空いている電車。悠々とたどり着く武蔵小金井の駅。そこに君はいた。

同じ制服の女学生が駅に吸い込まれていく。どこの学校かはわからない。皆和気あいあいで、通学すら楽しそうに見えた。ただの風景の一部。通り過ぎる女学生たちという、僕の中でのエキストラ。そのはずだった。でも、そこに君がいた。一瞬で世界が変わった。

「いつか奇跡が起こるかもしれない。」

一目ぼれに生きる希望を見出した僕は、毎日1時間早く学校へ向かった。1週間に1〜2回程君とすれ違った。なにか吸い込まれるような感覚で、遠くにいてもすぐに見つけてしまう。ただ、僕にもプライドがある。だから、ただ1時間早く学校へ向かうだけの生活で、君はその中の一瞬の光でしかなかった。いや、無理やりそうしていた。

君が世界を開いてくれたのは間違いがない事実で、僕は音楽やお芝居に目覚めた。モノクロだった日々が、こんなにも鮮やかになった。

「いつか奇跡が起こるかもしれない。」

高校2年になっても3年になっても、何も変わらなかった。変えなかった。成績は上がった。夢もできた。自分の道がどんどん開けていった。でも、君にとって僕こそがエキストラだった。シーン：武蔵小金井駅。主演：君。行男子学生A：僕。

大学への進学がエスカレーター式に決まり、高校3年の冬が来た。これまでの2年間、毎日1時間早く学校へ向かい続けていた。あくまで、満員電車を避ける目的として。

僕のくだらないプライドや世間体が希望を隅っこに追いやっていて、未だ僕はエキストラのままだった。

初めて焦った。もうしばらくすれば、学校も終わってしまう。君もこの3年間すれ違ったということは、きっと同じく卒業するのだから。焦った。とても焦った。

お気に入りのヴァンヘイレンのCDを袋に入れて、汚い字で手紙を書きなぐった。自己紹介と友達になりたいというシンプルな言葉そしてプレゼントのCDの、どの曲を聞いてほしいかの説明。どこまでもお粗末で、不器用なものだった。それでも、僕にとってはそれが宝箱だった。君に渡すことで初めて開かれる宝箱。君の反応で中身も世界も変わるであろう、パンドラの箱。

三日間持ち歩いた。たまたま3日連続して君とすれ違っではいたが、一歩踏み出す勇氣はとてもしゃないが持てなかった。

そしてまた焦った。奇跡は起きない。もう時間はない。完全に追いつ込まれた。もう、やめようと思った。宝箱は宝箱のまま。このままでもきつといいんだと思った。

それでも、四日目もまたそれを持ち家を出た。いつも通り1時間早く武蔵小金井の駅に僕はいた。

改札の左横。寒そうに友達を待つ君を見つけた。受験の時にもなにもおかしい拳動を見せなかった、自称鋼鉄の心臓が体中を揺らした。気がつくと君の前に立っていた。

「これ、受け取ってください。」

君が初めて僕の顔を見た。満月の様に大きく開いた目。朝日で茶色く染まった綺麗なボブカットの髪の毛は、少し浮き上がっているようだった。

「え……困ります。」

緊張の為か、声が脳に届かない。

「いや、受け取って欲しいんだ。」

彼女の手に宝箱を押しつけて、そそくさとその場から立ち去った。

やった。やってやったぞ。僕もやればできるじゃないか。大きな
一歩を踏み出した後は、得てして結果よりもその過程で満足するも
のだ。学校に着いても落ち着きそうもない鼓動をなんとか押さえな
がら、その素晴らしい1日を過ごした。

あくる日。大きな不安と共に家を出た。今日、どうすればいいと
言うんだ……。何も考えてなかった。今日君がいなければどんな
に楽か……。それでも、やはり1時間前に家を出た。

武蔵小金井の駅に着く。案の定君はいた。昨日よりは少し落ち着
いて君の前に立つ。

「あの、昨日はごめん。いきなりその……無理やり渡して。」

言葉がうまく出てこない。

「あ、いえ。その、CDは悪いから返そうと思って。」

恐らく君は、こんな感じの言葉を言った。だが、僕の脳は言葉を
うまく処理できなかった。

「いや。あれはあげるよ。僕はもう1枚持ってるし。」

たぶんこんな事を言った。不器用すぎる対応。相手の話が耳に入

っていないのが丸わかりだ。

「あ、もうすぐお友達が来ちゃうよね。それじゃ。」

逃げるように立ち去った。君が何か言いかけたような気がするが、
ともかくその戦場から僕は降りた。

そうして冬休みが来て、それきり君とはあわなかった。お互い3
年の3学期は学校の時間割などが変則的だったのだろう。同じ制服
の女学生たちも見かけなかった。

それでも、僕はどこか満足していた。何も結果が出ていない。た
だ、迷惑をかけただけなのに。汚い字の手紙に、女学生がそうは聞
かないであろう、ハードロックのヴァンヘイレンのCD。何も相手
のことを考えてない贈り物だ。

ただ一つ。僕はあの瞬間にエキストラからは抜けた。そして、君
の反応から自分の立ち位置が少し見えたのだ。今の自分はこんなも
のだと。さらに言えば、あの心臓の高鳴り。最後の一步。焦り。全
てが宝だった。それが、それ自身が何よりの宝箱の中身だったのだ。

あれは青春だった。でも、君にはなんだか悪いことをしたね。驚
かせてしまったし、もしかしたら相当気味悪がられてしまったかも
しれない。それでも2回目に話しかけた時、普通に会話しようと努
めてくれてありがとう。僕の視野を広げてくれてありがとう。世界
に色をつけてくれてありがとう。

君は僕の高校生活の青春そのものだった。本当に、ありがとう。
名前も知らない君。

第11話【青春の宝箱】（後書き）

本当にあつた話です。いまでも僕にとっては美しい思い出です。

一目ぼれではあつたけど、好きとか付き合いたいかじゃなかったんでしょうね。何かを変えたり、日常をドラマにしたり、確かめたかったりしたのだと今は思います。

幸せでいてくれることを祈っております。

第12話「広がる世界に取り残されるな。」

空を見上げる。青い空の向こうには、ほとんど真っ暗な世界が延々と続いていて、その世界はまだ広がり続けている。約137億年前に生まれてからずっと、大きな力と折り重なった次元が、押したり引いたりほどけたりしながら。この広さと長さを感じると、ほんの少し孤独を感じる。人間の存在。それはあまりに希少で脆弱な存在だとわかるからだ。

それ故か、歴史に於いて人は自分の世界を押し広げようとする。戦国時代。コロンブス。アポロ計画。大いなる知識。ミクロ・ナノ。様々な形で、我々は今尚進軍を続けて

いる。知れば知るだけ、孤独ではなくなるかの様に。この広がり続ける世界に、取り残されない様に。

「この宇宙は、更に加速しながら広がり続けている。決して届くことなどないのだ。決して……。」

そう、届くものではない。それでも人は諦めが悪い。もっとも大きな世界が届かないなら、小さな……いや、存在すら危ぶまれる世界を広げようとしているのだ。

コンピュータである。一つのサーバーが作り上げる広大な世界。人々はその土地を借り、HPや掲示板、自分の分身を作り上げながら仮初の暮らしを送り続ける。そう、ここにはある種際限がないと

言っても過言ではないのだ。今も方々の工場では、データやサーバーが引切り無しに作られ続けている。この虚無の空間はどこまでも広がり続け

、技術の向上もあつてか加速度的に広がり続けている。そしてそれらは多くの場合、インターネットという道の塊によってリンクされている。

届かないなら作ってしまう。むろん、その目的で技術が発展していったわけではなく現在の結果から見た世界ではあるのだが。

「この世界は延々と広がり続けているね。今の自分はどこにいてその果てはどこにあるのだろうか？果たして全てを見ることはできるのかな？」

考えてきた人間は沢山いることだろう。だが今、逆に自分たちの作った世界が広がり続け、その全てを熟知できなくなってきた。広い世界も、小さいはずの自身らの箱庭も、結局我々にとっては手に余るものなのだ。

捨てられた犬や猫の様に、誰にも見向きもされない掲示板やHP。パスワードや鍵をつけてしまったため、誰も入れなくなった誰かの嘆きのページ。気づかれない想い。忘れられた絵。そう言ったガラクタたちが、小さな空間で浮遊し続けている。

そして、最近ではコンピューターのAI機能（人工知能機能）なども増えてきている。つまりは、コンピューターの中に作られた個

体などが、自身の経験や意思で活動する機能である。よくハリウッド映画などで恐怖の対象にされるので記憶に新しい人も多いであろう。今はまだ単純な機能かもしれない。だが、この広がり続ける世界の中でこの機能を持ったものたちが暴れ出すことも、容易に考えられることだ。この世界は繋がっているのだから。

想像してほしい。そのAIたちが徐々に進化し、様々な経験を経てコンピューター上で遺伝子の様なものを作り上げ、増殖したり殺し合いをしたり、協力したり愛し合ったりしながら時間を進めていく。そしていつしか我々が作り上げてきた小さいながら広大な世界の中で思うのだ。

「この世界は延々と広がり続けているね。今の自分はどこにいて、その果てはどこにあるのだろうか？果たして全てを見ることはできるのかな？」

まるで我々の様に。そしてその果てを目指そうとうごめき始めるかもしれない。それがただの旅なら夢のあるお話かもしれない。だが、我々のコンピューター世界を壊しかねない侵略行為をするのならば、我々もそれに対抗せねばならない。例えばこの世界で大量に人が死滅してしまうインフルエンザの様な病原菌であったり、強力な爆発物を使った破壊行為でもよいだろう。あるいはその時間その物を止めるために、電源を切ってしまうてもいいかもしれない。

今はペットや自分の分身の様に可愛がっているAI機能も、目に余るような状況になった時の対策は考えなければならぬのだ。彼らがあまりに遠くを見つめないよう。我々の歴史の様に侵略を目論まないよう、我々は監視していかなければならない。

おつと、今まさにそれを目論んでいるものが近くにいやしないか？さあ、電源を切れ！切るのだ！！

プツンッ・・・。

もしかしたら、その瞬間に消されるのは我々の世界かもしれない。我々が何かの箱庭の中で活動していないと、そう言い切ることはできないのだから。

第12話「広がる世界に取り残されるな。」（後書き）

仕方がない。世界は広がっている・・・と、かの天才アインシュタインが言ったと言わなかったとか。

インターネットの力オースで膨大な世界って、この世界に似てるな・・・と思う今日この頃です。皆さんはどう思われますか？

そのうち、どこぞの天才科学者が言うかも知れません。

「仕方がない。世界は誰かの箱の中にある。」なんて・・・。

第13話【強者に送る言葉。】

「頑張つて」という無責任な言葉に、今日立ち向かった人たちへ。
「なぜ？」という疑問の目に、新たな自分を見つけた人たちへ。
「戦えよ！」という圧迫に、真つ向から勝負した人たちへ。

僕は誉めよう。僕は感謝しよう。僕は手を叩こう。あなたはともかく頑張ったのだ。今日という一日をしっかりと乗り越えたのだ。そこに何も問題はない。

大丈夫。あなたはどんな問題にもめげずに向き合えるだろう。逆に少し心配なくらいだ。誰にでも弱い自分が隠れているのだから。どうか無理をしないでほしいと願う。

余計なお世話かもしれないが、たまには少し休んでみたらどうかとお勧めしたい。人は疲れてしまうと盲目になる。自分の幸せや世界の動きに。そして時に忘れてしまう。この世界の弱い存在を。もちろんあなたも持っている、弱さ。

もちろん、あなたに何か苦言を漏らす必要はない。あなたは頑張っているし強いからだ。ただ、私は一つだけお願いしたい。どうか、あなたの様に強く生きられない人間たちに対して、そんな目で見ないで欲しいのだ。その人は約束をすぐ破るかもしれない。その人はすぐ自身を守ろうとするかもしれない。その人はすぐ逃げてしまふかもしれない。

世界の秩序や倫理的に見れば、約束を守れない人間は糾弾されるべきというのわからなくはない。ただ、どうしても弱い人間たちはそうせざるおえない時があるのだ。そして、その失敗の時点で本

人たちは酷く傷ついている。自身の存在を揺るがし、責め、苦しんでいるのだ。だからどうか、そんな目で見るのだけはやめてあげて欲しい。その目は、より彼らを駄目にしてしまうのだから。

その代わり、黙って見守ろう。本当に彼らが立ち上がれば、それは力強いはずだ。あなたにとっても。

許す素晴らしさを知ろう。そこには、本当の影が見えて人生をより豊かにする力が秘められている。

見守る勇気を持とう。そこには、あなたの心を、視線を美しくする光が溢れている。

悪口ではなく愚痴を言おう。そこには、あなたの本当の優しさが流れている。

その目の力を少し抜こう。そこには、偏見のない世界が映し出されている。

体に力を入れて、その領域から動けなくなる前に。

ほんの少し優しさを手に入れよう。

皆、本当に沢山の皆が視野を広げようとしている。

それはとても素敵なことだ。

手を取ろう。涙を受け入れよう。世界を見つめよう。

あなたも、急に弱者になってしまうかもしれないのだから。

その時にあなたが自分を責めない為にも、今美しくなる時だ。

第13話【強者に送る言葉。】（後書き）

【弱者に送る言葉。】を反対側から見た世界です。僕の周りにも弱い人も強い人も沢山います。ただ、時折見かける強者の殺意にも似た視線が悲しくてしかたがないのです。この文章は単なる僕のエゴでしょう。ただ、その上で強い人に見て欲しいと思います。本当の強さは、現時点の僕にはこういうことだと思っているからです。

第14話【雲の早駆け】

人一人。それぞれに空間も時間もあって。それは何かではかれるものでもない。だから24時間はしつくり来ないんだ。どうしても。

空を見上げる。冬の遠い空の中で、雲はゆつくり動いていく。

「動くな。動いてくれるな。」

雲が動くことで、時間が進んで行くような感覚に陥る。そこで留まってくれば全てが平等に静まり返る様な。ある種の破壊願望を含んだ想いがそこにある。

様々な人が「今」や「現実」を語る。文章で。歌で。体で。言葉で。その瞬間だけ共感して頷いたりうなったりはするが、実はあまり残らない。結局実際のところは、しつくり来ていないのだ。残念ながら。

無情にも風が強くなる。より上空の雲はまだゆるりと動いているが、手が届きそうな雲はどうだ。何かに遅れまいと疾走するように加速してゆく。やはり、時間は過ぎていく。

昔、今よりも酷い妄想の海で溺れていた。常に恐怖を含んだ想像の世界。自分だけの。非生産的な悪夢。早駆けする雲を見ると、それらが魑魅魍魎のように脳裏を横切る。もう忘れたはずの恐怖たち。

もし、自分に時間を止める力があつたなら。そんなことを飽きずに考えていた。音楽に耳を傾ける気になれない、漫画に手を伸ばす気力もない、そんな時にきまって。

もし、自分に時間を止める力があつたなら。まずはできる限り悪になろうじゃないか。お金も沢山手に入る。眺めているだけのギブソンのギターも自分のものになる。思春期のぶつける方向のない性欲も満たせることだろう。だが、きつとどれもできない。たとえ時間を止めることができて。妄想の中でさえ、僕は僕を越えられないのだ。生まれてこの方、万引き一つすらしたことがないわけだから、仕方がないと言えば仕方がない。

では、どうするのか。結局、何も変わらないのかもしれない。ただ、ボーっとして、また想像の世界へと逃げるのが積の山だ。

死んでやろうか。時間を止めて、自分だけが死ぬ。ビッグバンから137億年続いた宇宙を止めたまま、唯一動かせる自分が死んでしまえば、ある種全てが永遠だ。誰も発掘できない遺跡の様に。今が完全になるのだ。もちろん、誰も僕の死に気づくことはない。これからずっと。いや、時間という概念が消えてしまうのだ。ずっとという表現もなんだか滑稽だ。ただ、そこでまた気づく。自分は死ねない。無気力な時間帯も、こんなに生きたいと思ってしまうのだから。ああ、だが止まってみて欲しいものだ。この時間というものが。

そんな出口のない想いを空にぶつけていた、中学時代。夢を見つけることができないもどかしさは、いつもおかしい妄想へと消えていった。

では、今なら死ねるのか？空を見上げて問いかける。否。死ねない。夢がある。当時思っても見なかった夢が辺りを当時と全く違う世界に変えてしまっている。だから結局僕は死ねないのだ。生きるしかない。

それでも、相変わらず雲に羨望の眼差しを向けている。常に形を変えながら、ただ流れていく雲に。

目を閉じ、念じる。

「雲よ。動くな。時間よ。止まれ。」

目を開ける。雲の早駆けは止まらない。ただ、止まっているのは僕の心だ。この、ずぶい心と体だ。

さあ、随分ゆっくりしてしまった。僕も駆けだそう。どこへ向かうともなく。

第14話【雲の早駆け】（後書き）

約一か月半ぶりの投稿になってしまいました。その間、舞台の出演など、アクティブに仕事をしておりました。

こんな私の作品でも、気にかけてくださってる皆様。今後ともよろしくお願いいたします。

第15話 【鋼鉄のラブレター。】

大事な君へ。

固い意志をここに残そう。どこまでも広がる愛情の証拠を。決してありふれていない僕らの空間を。その想いを。僕はここに残さず記そう。

僕は決めた。僕は決めることができました。君を守ると。本当の意味で君を守ると。僕はこのギザギザラザラとしたハートに、固く尊い決心というものを持たせることができました。

思えば君は、僕の世界を随分変えてきた。人の弱さと愛おしさをまじまじと僕に見せつけてくれた。惜しげもなく。君は泣き、傷ついた。横暴であった僕の哲学はおかげで随分と優しくなったと思う。人と接する為の空間や湿気など。そういった物を君は沢山教えてくれた。

だから僕は決心したのだ。君を守ると。

君と結ばれる為に苦心した日々もあった。お互いに大いに悩み、傷をつけあってはなめあう日々もあった。どの距離が僕らの運命か分からずに、随分と想いの荒波にもまれたものだ。

君の涙を拭こうと、器用に生活しようと走る僕もあった。あまり信用を寄せていない神様にも祈った。言葉を探した。理由を探した。そこにはあまりにも輝かしい発見が沢山あり、僕を大人の人間にさ

せてくれた。

だから僕は決心したのだ。君を守ると。

なんとなく、運命的なものを共有しているのはわかる。事実、僕らは二度も結ばれ、そして離れていった。近い距離では、すぐに互いが見えなくなること。世の中にはこういう運命もあるのだと、誰か偉いお方が教えてくれているかの様に。

かつてはその距離を埋めようと必死に生きた。互いにもがいた。同じタイミングで。

だが、僕にはわかっていなのだ。この少し遠い距離こそ、君を愛せる最良のものだと。君が安心して僕に頼り、悩みも苦しみも痛みも僕に預けられるそれなんだと。

だから僕はここでいい。ここから君を見守ろう。どんな汚い話でも耳を貸そう。手を差し伸べよう。

命をかけるだなんて、簡単に使ってはいけない言葉だが、それすらも使おう。

結ばれないというところが、またそれはそれで美しい愛ではないか。

この距離がいい。この距離が一番優しいのだ。君の近くにいらるとこの決意がこの愛がすぐに熱で溶けてしまうのだ。

この距離がいい。この鋼鉄の想いを君にどっしりと持っていていられるこの距離が。

DNAの様な二重螺旋を描きながら、生きよう。
愛している。

第15話 【鋼鉄のラブレター】（後書き）

愛情・愛というのは、とても盲目的なものだと思います。この言葉たちの様な考え・想いもまた、エゴなのでしょう。勉強中でございます。皆さんの思うところも吐露して頂けると助かります。

第16話「やまない雨 IN パラレルワールド サトシ。」

「きょうはがつこうが、お休みの、日曜日です。ですから、ほしぞらえんのみんなでお昼ごはんを、つくりました。ぼくの大すきなカレーをつくりました。おさらにいれるときに、にんじんがはいらないようにしたのですが、サキ先生に見つかって、おでこにでこぴんされました。でも、おいしかったのしかったです。おさらあらいを、おてつだいしたら、サキ先生がおでこをなでくれました。「おてつだいありがとう。でこぴんいたかったかな？」と言ったので「いたくないよ。カレーおいしかったね。」とぼくは言いました。そしたら先生がわらってくれました。よかったです。 1月16日 雨 さとし。」

星空園。僕はこの孤児院で育った。日記の半年前。8歳のときにサキ先生が赴任してきて、それから随分目をかけてもらったっけな。この日記を書いた日はよく覚えている。朝から冷たい雨が降っていて、随分退屈していた。皆で雪になるかどうかかけたり、歌ったり。トランプをしたり部屋でボール遊びをして怒られたり。どうにかこの一日が早く過ぎないか。そんなことばかり考えていた。7歳の誕生日から日記を書いているのだけれど、この頃はだいたい昼過ぎには書き終えてしまっていて、この日もそう、お昼のカレーを食べた後すぐに書き終えてしまった。

孤児院、星空園。僕は記憶が定まらない頃からここにいるのだけれど、皆が皆同じではない。色々な事情や悲しい出来事なんかを被せられてここにいます。親を亡くしたものの。なんだかわからないうちに捨てられたもの。元々が片親で、その親が逮捕されてしまったもの。虐待を受けていたもの……。理由は様々だ。せつかく仲良く

なったのに、結局2、3日でさよならするやつもいる。僕みたいにずっとここにいるやつもいる。さよならしたと思ったら、また一か月で帰ってくるやつもいる。まあ何にせよ、皆わけありでここにいてるってわけだ。

日記を書き終えて、幼稚園組はお昼寝タイム。少し静かになった教室で、僕は外を見ていた。やまない雨。雪にもならない。中途半端な冷たい雨。

ふと、なんで僕がここにいるんだろう。僕にはどうしてお父さんやお母さんがいないんだろう。そんなことを考えはじめた。物ごろついてから、何度も考えたこと。歴代の先生に何度も質問したこと。でも、どこにも答えがなかったから、いつしか考えるまいようにしていたこと。だが、なんとなくこの時に考えてしまったんだ。もしかしたら、いつも無意識に考えていたのかもしれないけれど。しっかりと考えてしまったんだ。

別に悲しいわけじゃない。その理由が見当たらない。でも、涙が出てきた。やっぱり、悲しいのだろうか。

サキ先生が隣に座って来た。

「雨。やまないね。せめて雪になったら楽しいのにね。」

優しくふわりと話しかけてくれた。

「うん。とっても寒いしね。なんで雪になってくれないんだろうね？誰かが意地悪してるのかな？」

鼻声を隠しながら僕も答えた。

「雪になると外で遊んじゃうでしょ？そしたら風邪ひいちゃうかもしれないから、遠慮してくれているのかもしれないよ？」

サキ先生は、これは意地悪じゃないと言いたみたいだった。でも、なかなか前向きで素敵だなと感じた。

「そっか。うん。きっとそうだね。」

俯いてそう答えてから、少し静かな空間が続いた。乱雑な冷たい雨が落ちる音だけがここに響いていた。

「サトシ。サトシは今、何が悲しいのかな？」

泣いているのがバレていた。瞬間、恥ずかしいと強く感じたが、見てもらえている嬉しさにそれはすぐ変わっていった。

「うん・・・いいんだ。今まで誰もわからなかったことなんだ。とっても困っちゃうことみたいなんだ。皆もよくその質問をするけど、誰も教えてもらってないんだ。」

サキ先生は、少し表情を変えて僕の方を見つめていた。目は少し悲しそうに。でも口元には優しさがあった。

「先生に答えられるかわからないけれど、せっかくだから話してごらん？」

少し躊躇ったが、思い切って質問した。なんで僕はここにいるのか。なんで僕にお父さんやお母さんがいないのか。質問しながら僕

は先生の答えを予想した。先生はいつも神様のお話をする。だからきっと、神様の思し召しで、これは使命だ。なんて言うんだろうなと。そう思っていた。でも、僕の想像は裏切られた。

先生は教室のはじにある、壊れた望遠鏡を持ってきた。（以前教室内でボール遊びをして壊してしまった。）

「サトシ。この望遠鏡でお空を見て御覧？何が見えるかな？」

「これ、壊れてるんだよ？何も見えないよ。」

「壊れてないとして。何が見える？」

「うーん。雨と。雲？」

「そうだね。じゃあ、その向こう側には何がある？」

先生が何を言いたいのかさっぱりわからなかった。それでも先生があまりにもうきうきしながら質問してくるので、僕も少し楽しい気分になっていた。

「お日さまとかお星様とかかな。」

「お！正解！」

先生はより一層笑顔でうきうきしていた。

「それがどうしたの？先生。」

先生は僕をじっと見つめてからゆっくり空に目をうつした。

「お星様はね、すっごく遠くにあるの。知ってる？」

「うん。望遠鏡はすっごい遠くまで見えるけど、お星様はやっぱ小さいままだもんね。」

「そうだね。実はね、あのお星様はいつか爆発して死んじゃうの。」

「爆発しちゃうの？」

衝撃を受けた。星ってのはずっと張り付いてるものかと思っていたから。

「そう。それでね、爆発する時に色々なパワーを出すんだよ。その中には、お星様が爆発しちゃうときじゃないと生まれないものもあるの。それがね、沢山沢山旅をして、時々地球に落ちて来るんだよ。」

「隕石？」

「うん。隕石とか彗星とか。それでね。私たちの体も、お星様の爆発でしか生まれない物を沢山持つてるんだよ。」

「そうなの！？」

とても大きな話だった。

「だから、私たちは星の欠片なの。この宇宙のとっても遠くと繋がっているんだよ。一人一人ね。そうやって私たちはここにいるの。皆、お星様なんだよ。皆繋がっているの。サトシのお父さんお母さんも、ちゃんと繋がってるの。」

もう、最初の質問はふっとんでいた。僕の心はその時宇宙にあった。なんだか、優しい気持ちと安心感に包まれていた。先生にありがとうと言って、僕はもうこの質問をすることはなかった。

6年後、僕は中学生になっていた。星空園でも年長組に入って、学校やら先生のお手伝いやらで、楽しくも忙しい日々を過ごしていた。変わったことと言ったら、ミチルというお姉さんがお手伝いに来てくれていること。サキ先生も随分助かっているみたいだった。ミチル姉ちゃんは、明るくて優しい。僕が年長なせいか、しょっちゅうちょっかいを出してくる。将来的にはここで働きたいらしい。でも何故だろう。ミチル姉ちゃんには、僕や星空園の皆と同じ匂いがした。なんとなく時折見せる遠い視線が、なんだか少し苦しくさせるのだ。

その年の夏。タカキという男が訪ねて来るようになった。このおじさん・・・と言ったら怒るので、お兄さんと言っておこう。このお兄さんは近くで塾の先生をしているらしい。それで星空園の存在をしって、ボランティアで勉強を教えに来てくれているってわけだ。当時は相当怪しいと感じていた。茶髪でチャラチャラしてお調子者で。初対面の僕に。

「おう、サトシってのか。いくつ？中一？の割にはちっさいな。なに、すぐでっかくなるさ。」

なんて話をマシンガンの様にしてきた。だいぶ苦手だった。大体、僕は勉強は嫌いだった。お手伝いなんかで忙しいのに、大きなお世話だと思っていた。

「いいか。勉強つてのはさ、自分の為にやるんだよ。自分が知りた
い。色々な事を解りたい。だからするんだ。でも、基礎の勉強をし
ておかないと、自分が何を知りたいかわからないだろ？だからしっ
かり基礎からやろうな。つまり、色々な事を知ったり解ったりする
ための器を作ろう！そういうことだ。」

なるほどとは思ったけれど、僕は乗り気じゃなかった。サキ先生
はニコニコしながらその熱弁を聞いていたけど、なんだか嫌な気分
だった。でも、最初の理科の授業の時、それが全部変わった。

「宇宙つてあるだろ？ま、なくちゃ困るけれどな。あれは凄い。あ
れは凄いぞ？すごい広くて、すごい深いんだ！あゝ。何から話
そうかな。そう！じゃあ、僕らとの関係から話そう！実はな・・・
僕らは星の残骸でできてるんだ。DNAつてあるだろ？そのDNA
の成分はな、地球上では作られない成分でできてるんだ。じゃあ、
なんで僕らの中にあるのかつて？それはな、遠い昔、遠い宇宙のど
つかで星が爆発して死んでしまったんだ。その爆発の時、沢山のエ
ネルギーや物質が生まれるんだ。それが気が遠くなるほどの旅をし
て、この地球に運ばれてきたんだ。そこで、また沢山の時間や出来
事が起こって、今僕らがここにいてるってわけ！すごいだろ？」

僕は呆気にとられていた。また、僕の心は宇宙にあった。

「よし！じゃあ、今度はこの地球の歴史に興味を持ったよな？じゃ
あ、歴史の授業に移るぞ！」

タカキ兄ちゃんは、こうやって色々な物事を繋げながら勉強を教
えてくれた。時間を遡ったり先に進んだり。一個の気になることか
ら何本も枝分かれしながら、沢山の事を教えてくれた。勉強が苦手
な僕だけれど、なんだか全てが僕や宇宙と繋がっている気がして、

とにかく楽しかった。

ただ、一つ気になったのはその星の授業の後。いつも明るいミチル姉ちゃんが、少し遠い目をしていた。

「全部嘘だったらしいのに……。」

よく聞き取れなかったけれど、たぶんそう呟いた。あれはどういう意味だったんだろう。未だにわからないでいる。

そして今、僕は大学で天文学を勉強している。高校時代は学費の為にアルバイトに勉強。全てが忙しく流れていったが、奨学金ももらえて、なんとか大学に入学できたのだ。サキ先生は今も星空園で忙しく毎日を過ごしている。ミチル姉ちゃんは正式に星空園のスタッフになって、元気に働いている。

タカキ兄ちゃんも相変わらず星空園にボランティアで来ているんだけど、実は少し前にサキ先生にプロポーズしたみたい。ミチル姉ちゃんがこっそり教えてくれた。あの二人が一緒になってくれたら、凄く素敵なんだけれどな。今も僕を虜にしている宇宙。それに導いてくれた二人だもの。

それにしても未だに気になるのはミチル姉ちゃんのこと。いつも元気で明るいミチルねえちゃんが、なんであんなことを言ったんだろう……。

それはまた別のお話……いや……別の世界で。今日の日記はここでおしまい。

2014年 1月16日 雨。

サトシ 11年前の日記を

見て思い出したこと。

第16話【やまない雨 IN パラレルワールド サトシ。】（後書き）

こちらの小説も、一話読み切りという形で載せておりますが、これから違った視点、違った世界から沢山書いていく予定です。是非とも今後も楽しみにして頂けたらと思います。この小説関連のものは題名に【やまない雨】が必ず付きます。よろしくお願い致します。

第17話 【世界が教えてくれること。】

魔法はあるのか。どこにあるのか。割と皆の手元にあるのだ。それは例えば金だ。ただの紙切れだが沢山の物や満足に変身できるのだ。ただの紙切れだが人を殺すこともできる。ただの紙切れだが世界を変えることもできる。まさに魔を含んだ紙切れなのだ。

魔法はあるのか。どこにあるのか。割と皆の手元にあるのだ。それは例えば言葉だ。ただの波だが大いなる力や意味をもつのだ。ただの波だが人を救うことができるのだ。ただの波だが世界を動かすこともできるのだ。まさに魔を司る波なのだ。

仕方がないのだ。世界には魔法がある。存在を願う人もいるだろうが、否定してもそれは確かにあるのだ。それによって世界は複雑に素晴らしく、そして恐ろしくできてきたのだ。

心。それはその前にできたのか後にできたのかわからない。おそらく前だろうが。心はそれによって大きく揺さぶられてきた。喜び、怒り、哀しみ、楽しんで、高く空へ、深く海の底へと広がっていったのだ。そして今、それは遠く宇宙の向こうまで広がろうとしている。

シンプルにスカツと生きたいと願う人も多いだろう。それなら、無人島にでも行って野生化するしかないのだ。しかし、それも無理な話だろう。我々は孤独を愛するが、またそれに酷く弱い生き物なのだ。太古の昔にできたこの魔法は、そんな呪いも持ち合わせているのだ。

多くの人が自然的に体得するこの魔法たち。これが普通すぎて魔法だと気づかない人々もいるだろう。だが、考えてみれば人は二本足で立つて歩くだけでも恐ろしく難しい事をしているのだ。一見普遍的なことは、その実大変な奇跡におおわれていることは少ない。

その効力を知ろうとすればわかりやすい言葉と金。せっかく使えることを知った魔法なら、正しく使っていきたい。できれば人や世界にとって素晴らしいものになるように。

第17話。【世界が教えてくれること。】（後書き）

昔から、魔法が使えたらいいと考えてきました。でも、実際こうやって持っているものなのだと思います。正しく使えるようにしていきたいものです。

第18話【真実】

真実はどこにあるのか。ここにあるのかそこにあるのか。それともどこにもないのか。

映画、音楽、ゲーム、ギャンブル。ある程度の裕福さがあれば、世界は飽きずに楽しめるように作られた。そんな世界に、私は飽いている。

どれもこれも同じように聞こえる音楽と陳腐な歌詞が世界を覆う。何度も見たような光景が画面に広がる。自由という名の不自由な箱庭を提供してくる機械がある。逃げるのが難しい勝負の空間を作り上げ、勝つても負けても悪循環へと誘うもの、それに誘われるものたちがある。

私は飽いている。どこにも真実がないことに失望している。

今どこにいるのかと問われれば、それを特定するものはない。住所があるではないかと言うものもあるだろう。なるほど、管理の行きとどいた一見確かなものにも見える。

だがどうだろう？とことん問い詰めてみよう。

「あなたは今どこにいますか？」

私は今、東京都の町田市にいる。

「東京都の町田市とはどこですか？」

日本の関東地方の一部だ。

「日本とはどこですか？」

それは地球のアジアと呼ばれる地域にある。

「地球とはどこですか？」

太陽系。太陽を周回している惑星の一つだ。

「太陽系とはどこですか？」

天の川銀河の端に位置している。

「天の川銀河とはどこですか？」

宇宙に存在する１０００億、あるいは一兆あるともいわれる銀河のうちの一つだ。

「宇宙とはどこですか？」

・・・そんなもの、知るか。それ以上大きいものは知らん。あえて言うなら、ここ。ここが宇宙だ。

このように、広すぎる世界の中でミクロの生活をしている我々は、自分の居場所すらわかりはしないのだ。

そんな我々にとっての「真実」とは一体なんだろう？

例えば、この胸が痛むこと。あるいは喜びに満ちあふれること。

これが真実だろうか？

そう、ともいえるが否ともいえるだろう。形になるものではないからこそ、あるともないともいえる。ただ、それだけのことだが。

ならば、愛と言ったものであったり憎しみといったものであったりするものであろうか？

これはかなり危うい。これらは大抵「真実であって欲しい」という願望や執着によって割増されているものだからである。

すると、ここがどこであろうと、私が今ここにいる。これこそが真実であるのだろうか？私がいるかどうかを疑っている自分を疑うことはできない。確かに疑っている。私の大好きなデカルトはやはりこう囁く。私はわずかに頷きそうになるが、直ちに「これが夢だとしても？」と切り返す。デカルトの幻想は消え、広がるのは闇。闇だ。

我々は、実はだいぶ危うい存在である。想像してほしい。「死」というものを。あれはきつと相当まずいものだ。天国、地獄、三途の川……。死後の世界は色々と描かれているが、それこそ怪しすぎる。実際人は、眠りに着く瞬間から夢に入り込む間も虚無に限りなく近い。その虚無こそ死なのではないのだろうか。もちろんこれは誰にもわかりえないことであるからこそ、真実にはなりえないのだが……。死から始まる虚無。何も考えられず何も感じられない。つまりはそこにいない。本当にまずいものだ。それを誰も拒否することはできない。いつかはたどり着く虚無という場所なのだ。

だが、その死すらも真実かどうかは怪しい。これが夢に近いものなら、なに一つ真実ではないのだから。

つまり、真実はない。これこそが真実である。とても、矛盾しているがこれが一番近いものだと思っ。

物事をはかり、リアルにしてくれる数字も。今まで積み上げてきた歴史も。夢を与えてくれる星たちも。どれもこれもが真実とは程遠い存在である。

だが、悲観するのももつたない。たとえ真実がこの世になくとも、我々は前に進むことに執着すべきなのだ。あたかもリアルに。全てが真実だと言い聞かせて。前に進むしかないのだ。

一秒前の自分を否定できない自分は、今の自分ではない。それは一秒前の自分だ。ただ、そういう単純なことなのだと思う。

だから私は願ひ信じる。あなたがもし1000粒の涙を流すなら、それがせめてリアルなものであつてほしいと。

いつか得体のしれない「死」というものに食われる我々だからこそ、そうあつてほしい。

本当の涙は、いくら流してもいいのだから。

この想いが。真実がどこにもない地盤の緩いこの世界の中で。真実に近いものであることを願う。いや、今はそれが真実だしよう。そう、しよう。

第18話【真実】（後書き）

本当に、不思議な世界です。ただ、広くて素晴らしい世界だからこそ疑問の中に生きることができるのだと思います。

明日、明後日も私も世界も変わり続けるでしょう。それを愛おしくすら感じられます。皆様はいかがですか？

さあ、夢を見て目が覚めたらどこへいきましようか。

第19話【三つの塊の物語】

ある時ある場所に、三つの塊があった。ある時ある場所。これでは曖昧すぎるか。では、時間という概念のない世界で特に何かがあるわけではない場所、と記しておこう。

そこに三つの塊が存在していた。

一つは小さいが荒々しい塊であった。広い世界や大きなものに憧れるわけではなく、ともすれば全てを自分のものにする。あるいはそれが敵わないのなら食いつぶしてやろうという野望で、体はピリピリギザギザしている。

一つは大きくて穏やかな塊であった。どこを見るともなく、少しボーっとしていて、他の塊から零れる想いを受け流すでもなく受け取るでもなく、ただただ頷いている。その穏やかさから、それは少し平らにのっそりどっしりとそこにある形である。

最後の一つは大きくも小さくもなく、紳士で誠実な塊であった。辺りを見渡しながらもその目は何か一つをしつかり捕えていて、時に小さな荒々しさと議論したり、また時に大きなそれとゆつくりとくつろいだりしていた。地面に足を着く、自由のききそうな形だ。

「おい、お前ら目障りだぞ。そこにいられると俺の世界が邪魔される。どこかへ行くなり俺に食われるなりしやがれ！」

小さな塊は怒りを前面に押し出して叫んだ。

「君、それはいくらなんでも粗暴ではないか。そんなに自分勝手

な事をいうもんじゃない。それに僕らが去ってしまえば君は一人ぼっちの孤独の身になるんだぞ？」

誠実な塊は諭すように、だが少し厳しく言葉をかけた。

「孤独なんぞ恐ろしくはない。むしろ貴様らがいるから孤独という概念が生まれるのだ。さっさと消えてくれ！」

「ん？何か言ったか？」

ようやく小さな声を聞きとった大きな塊が寝返りをうつように振り向いた。

ドシン！！

「おい！あぶねじゃねえか！！お前はそう動くなと何度も言っているだろうが！！危うく踏みつぶされるところだったぞ！」

小さな塊はぴょんぴょん跳ねながら抗議したが、大きなそれはしばらく何かを考えるようにボーっとしてようやく「いやあ、すまん」と零した。

「全く貴様のようなやつは、せめて俺の下にいてくれよ。それでこそそのでかい図体が役に立つってもんだ！」

「こら。君の勝手に誰かを踏み台の様に扱うなど、許されるわけがないだろう？」

小さな塊と誠実なそれはまた議論を始めた。

「まあまあ、確かにその小さいの言うことも一理あるさ。僕はあまりに大きな体を持っている。どうか二人、僕の上で休むなり話を聞かせてくれるなりしてくれ。」

大きな塊は、ゆったりと大きな声で二人の議論に割って入った。

「最初からそういやいいんだよ。よつと。」

小さな塊は大きなその上に飛び乗り、満足そうに辺りを見渡した。

「さあて、どこからどう俺のものにしてやるうか。全てが俺のものになれば、何も恐れることはないからな。」

「なるほど、君は何かを恐れているわけか。だからその恐怖を取り除こうと全てに対して荒々しくあたるわけだな。」

「うるせえ！お前のような全てを知ったかぶりしなきゃすまないやつにはわからねえさ！」

「知ったかぶりとは随分だな。君よりは視野を広く持っているつもりだよ。」

二つの塊はいつ果てるともなく、議論を続けた。大きな塊は何に反応するわけでもなく、ただじつとそこにいた。

「ともかく、この世界は俺のものだ。俺が破壊し食いつくして自分のものにするんだ！邪魔するな！」

小さな塊はギラギラしながら、誠実なそれを威嚇した。

「そうはいかない。僕らはこの空間から、それ相応の物だけを頂いて、うまく存在し続けなければいけないんだ！壊さない程度に。自分たちが壊れない程度に。」

「なら、このでかいやつはまずいんじゃないのか？こいつは大ぐらいだ！こいつがいる限りこの世界が枯れ果てるのは目に見えているぜ！」

誠実なそれは痛いところを突かれたと。カタカタワナワナした。

「それもそうだな。僕が意思を持つとする限り、どんどんここは枯れ果てて行くだろう。ほら、こうしている合間にも、僕はどんどん食べてしまい、そして大きくなってしまふ。ここらで止めてもらうのが賢明だろうなあ。」

大きな塊はおつとりと、しかしできる限り真剣に言葉を並べた。

「ぐ……しかし……。」

誠実なそれは考え込んだ。

「それ見ろ。こいつは俺の地面になるか食われるしかねえ運命なんだよ！」

「だが、君にこの世界を委ねてしまつと、きつと全てが壊されてしまふ。この空間が……。」

「黙れ！その考えも貴様の勝手と言えるではないか！」

「ふうむ。一理あるなあ。ではどうだろう？僕はこの空間と同調して、君たちが生きる空間となるう。そして君たちは一つになるってのは？」

大きな塊の発言に、二つのそれは呆気にとられた。

「何を寝言をほざいてやがる！忌み嫌っているこのやろうと俺が一緒になるはずがないだろう！」

「そうだ。僕らは相いれない。そんなことは無理だよ。」

二つはそれぞれ懸命に訴えた。大きなそれが一旦動き出せば、抗うことができない程の力を持っているのは明白だからだ。

「いや、それしかないさあ。これは勝負だ。小さな衝動、欲望が世界を破壊するか。それともそれを抑え込んで調和を目指すか。僕は大きく膨張して、君たちを見守ろうじゃないか。ああ、少しくらいの寝返りは許してくれよ。膨張すれば意識がうつすらとして、小さなことには構えないからなあ。」

二つの塊は完全に沈黙し、考えた。大きなそれはただじっとその時を待った。

「うむ。それはいいかもしれないな。それなら全てが存在したまま、なんとか調和できるかもしれない。」

「何を言つてやがる！お前ごときに俺を抑えつけられるわけがないだろう！！見くびるな！」

「おや、怖いのかい？僕と勝負するのが。」

「なに！？・・・いいだろう。吐き気がするがお前の中に入ってやろう。だが後悔するぜ！？おかしいな真似をすれば、すぐにでも俺がお前を中から食いつぶす！いや、そのまえにそのでつかいのに踏みつぶされるかもな。」

「うん。それでいい。大きな君は、ほとんど無意識になっとうだろうが、きつと見ていてくれ。そしてそれでも駄目な時は、僕ごと踏みつぶしてくれ。」

誠実な塊は覚悟を決めた。小さなそれは大声で笑ってしまうのを堪えるかの様に、うすら笑いを浮かべていた。大きなそれはじつと聞き入って、一度大きく頷いた。

「ではこうしようかあ。君たちはこれから精神的に成長していくだろう。そして、その成長のある種の分岐点になるであろう日に、僕は意識を取り戻そう。そして審判を下すよ。君たちがこのまま進むべきか、消えるべきか。」

「ふん。その時は貴様の体を食い破って、そのままの勢いに全てを手にしてやるさ。」

「ああ、構わない。なんとかやってみようじゃないか。」

「きつと、大きな僕の無意識上の些細な振動でも、君たちは大きく傷つくことになるが、それでもいいというんだなあ？」

「もちろんだ。その時に起こる悲しみも、僕は手にしなければならない。けないんだ。そして小さな君も。それを知らなければならない。」

「ごちゃごちゃ言っでねえで、早く始めるぞ？どうせすぐガタがくるんだ。さっさと終わらせてやる。」

「じゃあ、始めよう。」

小さな塊は誠実なその中に入り、大きなそれは膨張してその姿は見えなくなった。

誠実な塊の心と、小さなそのとがごちゃまぜになり、心が生まれ、のちに「人間」と呼ばれるものになった。

ここから襲い来るであろう様々な事象。変動。光。涙。想い。闇。発見。失敗。一つになった塊は、足掻き続けた。

そして膨張した大きな塊が意識を取り戻す日は近い。人間が歩んできた道。それに審判が下る日が。

孤独から逃げるように増殖した人間の中にも、なんとなくその日を覚えていたものがいたらしい。

2012年12月。それがその日・・・なのかもしれない。

第19話【三つの塊の物語】（後書き）

人間は複雑です。時折、自分自身がわからなくなる時があります。難しいのです。とても。

今回は噂の2012年というキーワードを取り入れてみました。何が起こるのでしょうか？一体。ただ、何かしらの変化はあるのかかもしれませんね。

杞憂に終わればいいのですが。

宇宙規模での変動なら、なすすべないんでしょうね。

ただ、我々はそれでも普通に、しっかりと生きていくしかできないのはなんとなく想像がつきます。複雑なのに単純・・・ですね。

第20話「たとえ君と政治」

以前紹介したが、私の同僚に「たとえ君」というあだ名の者がいる。すぐたとい話をするところがあるので、そういうあだ名になった。まあ、私しか呼んでいないのだが。

最近のたとえ君を例えるならば、煮込みすぎた大根の様である。本来の味であるあの食感もなく、グニヤリとしていて箸を入れるだけで崩れてしまい食べ辛い。これから多少イラっとするぐらいたとい話を聞かされる事を考え、先に例えておいた。

本来不便とも言えるほどの超集中力を持っているたとえ君であるが、最近はおくびばかりしていて張り合いがない。先日問いただしてみると、毎晩毎夜洋画を借りてきて鑑賞しているらしい。そういえば少し前、彼が映画に明るくないことを突っ込んだのは私であった。そうか、その時は笑っていたが余程悔しかったらしいな。それからたとえ君はレンタル屋の棚を片っ端から借りては観て勉強しているらしい。さらに昼休みなどは、映画に関係している著名人の本などを読み、映画の周りの相関図まで詳細に頭に叩き込んでいるようだ。うむ。さすがはたとえ君。一旦何かに執着すると凄まじいものだ。だが、今朝私が「スタローンとシュワルツネッガー」の筋肉は全てCGだ。」と説明したところ偉く感心していた様子を見ると、どうもまだ勉強が足りない（というか、他の何かが足りないのかもしれないが。）らしい。

ともかく、昼休みも終わりを迎えたので、ちよつとたとえ君をいじくりはたき摺り倒してみよう。

「やあ、たとえ君。随分眠いようだね。」

「そうさなあ。例えるなら、壊れかけのレイディオのようだ。周り通信するのに苦勞する眠さだな。」

虚ろな目を擦りながらも、たとえ君はやはり例える。“レイディオ”という辺り、徳永英明を意識しているのは間違いない。彼の目を覚ます為にも、真面目な話題をふってみるとするか。現実に戻ってもらわなければ困る状態でもあることだし。

「そうか、それは辛そうだな。ところでたとえ君。最近の政治（2010年4月。）をどう思うね？」

「うむ。そうさなあ。あれはまるで自信過剰のドライバーの様だな。」

「ほう。それは一体どういったことだい？」

「うむ。政治というものは本来、『政府なんて必要ない。我々は自身でこんなに幸せに暮らせているではないか。』と、民に感じさせるものでなくてはならないのだ。しかし今の政府はどうだ？やれマニフェストだ。仕分けた。改変改革だと。運転に例えるならばスピードを大いに出し、抜け道だからと細くガタガタな道をグネグネウネウネと進み、しかもナビや運転手が一つではなく幾つも用意されている状態だ。運転というのは、助手席の人間が車に乗っているのを忘れてしまい、眠りこけてしまうくらいの運転がいいものなのだ。政府もまた同じと言えよう。」

ほう、たとえ君にしてはいいことを言う。確かにそうである。政府が車なら助手席は国民だ。国民が車に揺られているのを忘れて幸せに過ごせる政府というのはまさしく理想であろう。もちろんその

場合、国民もその政府を評価してこそ互いに持ちつ持たれつでいけるわけだが。いや、初めて感心したぞ。たとえ君。だが、たとえ君の演説はだんだん熱を帯びていく。

「であるからして！政治に派手さはいらない！違反をするなどはもつての他だ！！自身のアピールと善行をあらわにしている暇があったら、山積みの問題を一つ一つ片付けたまえ！！不正のかんぐりももちろん必要だが、とにかく今は国家をちゃんとした道へと導くことが必要だと、僕は思うんですよ！！」

ついには立ち上がってしまった。因みに私はかなり前から話し相手であることから逃げ、パソコンに向かってる。もちろん周りの同僚もそうしている。部長の尾崎にチラッと目をやると、丸い眼鏡の奥に潜んでいる目を同じく丸くしながらたとえ君をみているが、何かを諦めたかの様に書類へとその目を沈めていった。

「たとえ君は、政治に熱心なんだね。」

「ああ、やはりいつの世も激動の時代だからねえ。政治については敏感に生きているつもりなのだよ。例えるならば、熊蜂の飛行・・・」

「それはこの間聞いた。他の例えにしてくれ。」

「そうだったな。そうさなあ。例えるならば餌付けされた野犬のようだ。餌をくれる家の様子は逐一気になるというものだ。」

「ほう。以外に受け身なのだね。政府が主人のようではないか。」

「いや、そうさなあ。そうさなあ。それも例えるならば、花見の様

なものだ。華が咲けば酒を飲む理由ができる。いやあ愉快だなあ。やはり政治は華なんだな。」

「さつきと偉く矛盾しているぞ。たとえ君。」

が、この突っ込み空しくたとえ君の目は急激に虚ろさを増していき、遂には寝た。午後の仕事用に残しておいたか細い体力を、演説と例えに使い果たしてしまったらしい。

映画を少し控えるよう、帰りにでも進言するとうとう。

10分後、鼾をかき始めたたとえ君に気付いた部長の尾崎は、また目を丸くした後何かに決心したように一回立ち上がったが、やはり何かを諦めたようにまた座った。

変な会社だ。全く。

第20話「たとえ君と政治。」（後書き）

たとえ君はこれからも、色々なことに非凡な集中力を発揮し、おかしなたとえを続けることでしょう。こつこ期待（笑）

第21話【朱夏】

日々がヒロイックに過ぎていき、僕らの心に優しさも痛みも強く残していった青春。ただ駆け回るだけでも喜ばしい。瞬間の笑顔が美しい。些細な問題が悩ましい。ギューギューに詰まった春が終わり、それは過去の栄光となる。

台風が去った後には静かな日々が？隙間の空いた時間ばかりが目に見えるのか。そこはきつと涼しくて、青春に片思いする空間が広がっている。

否、朱夏。青春のあとには真つ赤な夏が待っている。青春の中で得た力をぶつける夏が。白い秋が訪れるまで。終わりが見えなかった青春よろしく、終わりのない朱い夏が今あるのだ。どこにでも行ける。あつくあつく暑苦しい程に。僕らの命が燃える時だ。

体力が落ちた。あの頃はよかった。今から始めても。

ネガティブなベクトルに熱量を使うな。今こそ前進すべき時。幸せを掴むんだ。本当の本当の幸せを。今でも涙は流せるんだ。滅多に感情的にならなくなったって？我慢してる、逃げているだけだ。

ここは朱夏。青春よりも心の温度が熱い場所。なにも恐れることはない。より大胆に。より美しく。この命を燃やそう。白い秋が見えるまで。その先の黒い冬の中、静かに眠りにつくために。

老けこむにはまだ早い。いやむしろ、今こそが一番輝く星になる
ときのだから。

第21話【朱夏】（後書き）

青春って何歳までなのか。それはその人次第なのかもしれませんね。

中国では春に当たる色が青。夏が赤。秋が白。冬が黒だそうです。中国の思想や発想はとても為になりますね。秋が茶色じゃないあたりが僕は好きです。

第22話【クロムハート。】

クロムハートが欲しい。強く、固く、折れない心。
ここを行き止まりにしたいから。ここを全ての悲しみの行き止まりに。

僕がそれになりたいんだ。

誰かが泣いて誰かを泣かす。その誰かが誰かにすがる。
困った誰かは誰かに怒り。怒った誰かが誰かを狂わす。
狂った誰かは誰かを殺し。死んだ誰かは皆を泣かす。
泣いた皆は皆を泣かし。いつか皆が皆を殺す。
終わりの見えない冷たい連鎖。

だから欲しい、クロムハートが。
泣いた誰かの盾になり。困った誰かの支えになり。
怒った誰かの部屋になり。狂った誰かの壁になる。
不当な悲しみの行き止まり。クロムハートが欲しいんだ。
世界の涙の器の様な。強くて広いクロムハート。
欲しくて欲しくてたまらない。

だれも苦しめない世界。悩まない世界。涙しない世界。
不当な死など存在しない。なんて素敵な世界だろう。

少し視野を広げてみる。

60億人が期待する。60億人がじつと見る。

追い詰められて行き止まり。

窮屈さに息止まり。

圧迫されて生き止まる。

苦痛、悲しみの泥の中。クロムハートはただの石。
ただただ涙が止まらない。ただただ涙が止まらない。

ずっと伸びる誰かの右手。

抱きしめられる柔らかい温もり。

やさしい言葉。包み込まれる幸せ。

恵まれていると実感する。

クロムハートが溶けていく。温もりの中で溶けていく。涙の温度が
変わっていく。

そうだ誰かを抱きしめよう。この温度を伝えよう。
冷たい連鎖を温かく。泥の涙を美しく。

心の温度で溶けたクロムは、
体を走り回る血液に似ているんだ。

皆でどんなに泣きぬれても、錆びない心、
クロムハート。

第22話「クロムハート。」（後書き）

錆びない心が欲しいと、いつも望んでいます。それでも、無情な時間の経過の中で、それは血の様な臭いを伴って錆びていきます。折れないように、錆びてしまわないように。そこにある恐怖。

でも、心は本当は自由だから、また溶けて新しくなるのだと、そう信じていききたいと思います。

第23話「素直になれたら。」

素直になれたら。素直になれたら。どんなに楽なことであろう。それを許さないのはそう、他でもない私だ。私の理性はどこにある？ 本当の理性は。少し周りを見渡しても、結局孤独を美德とする私がここにいます。

実に粗末なことだ。わかっているのに。私は一体どこにいるのか。本気で怒ったり笑ったりするフリ。やはり理性の賜物だ。

素直になれたら。素直になれたら。どんなに美しいであろう。孤独という枠の中。なんと守備的で狭い空間なのだ。私という個人を守るための城塞。これを壊せたら、素直になれたら。きっと色も匂いも変わるだろうに。

孤独の恐怖は、独りになることではない。沢山の人間がいるなかで、それでもなお孤独になるのが恐怖なのだ。だから必死に同情、共感をする。僕らは一つだと、綺麗事を並べて。

素直になれたら。何も考えず、赤子の様に生きていられたら。収穫したての野菜のように、全てが新鮮だろうに。今はくたびれた冷凍食品。擬似的な味をすぐに作り出せてしまうだけの。便利で不便なこの理性。

TVドラマや流行歌の惚れたはれたから目を背ける。この二ヒリズム。必要なのに、邪魔でもある。陳腐だと見下すことで、自分の上にいたための。やはり小さく狭い砦。

素直になれたら。この夏の暑さも、冬の痛いほどの寒さも。何か

を生み出す種になるだろうに。いつか芽吹く種に、それはもう美しく凛々しいスローダンスを踊る、そんな植物になりえるだろうに。

それでも素直になれない。手が届かない君への恋心を、握りつぶしていたいから。徹底された自分への皮肉。全ては鏡なのだ。

人が変わったという時、それは本当は自分が変わったのだ。人は自分の鏡。

もう素直にはなりえない。だが、リセットはできない。せめて、本気で笑ったり泣いたりできるよう。この二ヒルをも包みこめるよう。孤独を寂しいと感じられるよう。全てを大事にしていこう。それが『恐怖』だと罵られようとも。

第23話「素直になれたら。」（後書き）

素直には、簡単にはなれないものです。それを追い求めてもきつと、届かないでしょう。大は小を兼ねる。そううまく作られてはいないので。人間は。

きっとそれでもいいんでしょう。そう認めることが、今できる精一杯です。

第24話【僕の緑と君の赤。】

私とあなたの違い。僕と君の違い。俺とお前の違い。根本はなんだろう、と考える。

僕の中から見たものは、君は見るできない。同じく、僕の中から見たものは全世界、70億人の人々は見ることはない。逆を言えば、全世界70億人が自身の目から見たものを僕は見るできない。

だから、本当のことは意外とわからないんだ。君のことを美しいと言う人は沢山いるけれど、うん。僕もそう思うんだけど。皆が思ってる美しいと、僕が思ってる美しいは違うのかもしれない。

だって、僕は青色をずっと青色だと思ってきた。でもね、他の人の目を通して見るこの青は、僕にとっては緑かもしれない。でも、皆生まれてからずっとそれを「青」だと思ってきたわけだから、この色は何色？って聞けば、みんな口を揃えて言うはずさ。「青色」って。だからね？君のことを美しいって、かなり多くの人言うけれど、彼らの感じている美しいと、僕の感じている美しいは違うってこと。わかるかな？

観たい映画で喧嘩したのは15分前。まあ、喧嘩と言っても大人しい二人だから。うん。静かに話し合う感じ。それでもまだ彼女は、目の前で精一杯頬を膨らませている。

それを聞いて、私はどうすればいいの？笑えばいいの？泣けばいい

いの？混乱しちゃうよ。そんな難しい話をされても。

いや、つまりはね？君が僕にとって特別なんだって話。僕はこの僕の目から見て、君を特別な人だと感じているんだよ。

それは・・・嬉しいけど。でも、なんでこんな話になってるの？

うむ。そう言えばそうだ。何故観たい映画で揉めることからこんな話になったのだろうか？そもそも、何故揉めたんだっけ？僕は集中して考える。考える。ふと、彼女に目をやると、彼女はジーツとこちらを見ている。今の彼女は正に赤。色で言うなら、赤ではない！・・・待ってるのか？僕が何かを発するのを。待っているんだ。きつと。これはプレッシャーだ。

僕はさらに考える。そうそう、最初は何の気なしに映画館に来たのだ。そこで彼女が物欲しそうな顔でポスターを眺めて・・・。ああ、そう。そのポスターが日本のイケメン俳優集合！と言わんばかりのキャスティングで・・・。僕はこんな映画はきつとつまらないから、洋画から面白そうなやつ探そうよと言ったんだ。そしたら少し苛立ちを含んだ目で僕をジーツと見て・・・。

うん。確か若手俳優ばかり出ているからって、つまらないとは限らないでしょ？と、そう言ったんだ。それでも僕は邦画なんて家のソファで観るに限るよ。迫力もないし。・・・なんてつらつら話してしまつて。そしたら彼女が・・・私のことちゃんと見てくれないのね。私はわかってるのに・・・って言うから・・・。ん？そもそも、なんで僕はこんなにこの邦画を観るのを嫌がったんだ？

熟考する。もう、彼女の視線は気にならない。だが、きっとまだジーツと見ているんだろうが。もしかしたら、さっきよりも赤くなっているかもしれない。

ポスターに目をやる。イケメン俳優たちが凛々しい顔つきで映り込んでいる。・・・そうか。そうだったのか。赤はどうやら彼女じゃない。僕なんだ。

彼女の方に振り向く。

ごめん。どうやら嫉妬していたらしい。

ポスターに手をやる。彼女の目が追う。彼女は笑う。大きな声が出ないように、両手で口を押さえながら。

良くなりました！もう、180°周って面白くなっちゃった。

二人、手を繋ぎ、その邦画のチケットを買った。

第24話「僕の緑と君の赤。」（後書き）

自分でも何の感情なのかわからなくなる時があります。まあ、このお話の男よりは鈍感ではないですが。でも、最初に恋愛したときなんかはあんまり変わらなかったかも・・・かもしれないですね（笑）

第25話【眠らない者たちへ】

天の川銀河のはしっこで 今日も目を開けながら夢を見る

涼しくなった午前二時 眠らぬ者たちの想いが絡まる

全ての原因は「待っているから」 30億年後の恋人を その時を

アンドロメダが僕らの功績を飲み込む その瞬間を

今ある全てが その為にあるとしたら

終焉を目的とした 愛情 葛藤 思考

なんという悲惨で美しい予定調和だろう

だから眠らない 天の川銀河のはしっこでただただ何かを待つ者たちよ

想いはどこまでも遠くへ飛ばしていい 心はいつもここじゃなくていい

ただ今は目を閉じよう 今はまだこの時間の中だ

いつか解放され 何もかもが覆され 1+1が数字にならない世界になったとき

遠くを見た分だけ しあわせ になれる

天の川銀河のはしっこで 今日も一粒の星が降る

その頬の涙の中 涼しくなった午前二時

第25話【眠らない者たちへ】（後書き）

天の川銀河とアンドロメダ星雲は30億年後に衝突するそうです。もしそれが今の結果なら。いや、それでも今が濃密すぎて、ここからは逃れられないことでしょう。

第26話【世界の終わり。その一例】

生きとし生けるもの。終わりは時に突然。わかつてはいた。わかつてとしていた。つまりは、わかつていなかった。

いつもと大きさは変わらない太陽。僕らはそれから逃げていた。光のない闇へ闇へと。逃げ惑っていた。

わずか3時間前、2000光年の彼方で起こったと言われるガンマ線バーストが地球を横切った。2000年の旅。僕らの大事な防御壁。オゾン層を根こそぎ奪って。

何が起こったのかわからなくて、でも空はあまりにも綺麗なカーテンが多量に踊っていて、僕らも気楽に喜んだ。

だが、太陽に目を向けた瞬間、大きな二つの光の輪が目には焼きついたその時、僕は視力の半分をさらわれた。

僕はまだマシかもしれない。すぐに木陰に隠れたから。物珍しそうに空を眺めていた人々は、その脅威に気づいた時には全てが遅すぎた。

沢山の断末魔が、不協和音を奏でる。負傷した目を押さえていた手は、自然に耳へと移行する。

色々な者が焼けている臭い。火事の比ではない。その天から降り注ぐ怒りの炎は、アスファルトも車も全てを溶かしていく。

これが、地獄か。ほとんど視力を失った目をなんとか開き、静か

に観念する。

それから何時間経ったのか。地獄は一時的に去った。つまり夜が来た。それでも皮膚はジリジリ音を立てる。汗は一向に引かない。

どうやら夜らしいが、そもそも自分がまだ生きているのか。実感は乏しい。

人の行列が目の前を通りすぎる。この熱い中、長袖を着て。大きい人や小さい人。皆、可笑しな恰好をしているなど、笑みがこぼれる。

これは、ハロウィンか？いや、こんな日に賑やかで結構結構。

皆スイカをくり抜いた物やカボチャをくり抜いたものを被っている。

もう、僕の乏しい視力では詳細は分からないが、恐らくスイカの中はサングラスをかけているのだろう。黒目が大きくて、可愛いハロウィンだ。

どうせ、逃れられないのに。もう、地下へ逃げよう。何処へ隠れよう。この空はこれからずっとこの脅威を一日10数時間人々に与え続けるのだ。

逃げた先は、恐ろしい地獄。今度は人と人との恐ろしい地獄。僕は、もう、ここから動く気にはとてもなれない。

この残り少ない視力が捉えるものは、美しいオーロラ達。そういえば、一度でいいからこの目で見てみたいと思っていたんだ。

さあ、朝よ来い。もう、僕は闇へは逃げない。その光の中。静かに入って行こう。連れて行ってくれるんだろ？もっと遠くへ。

空がほんの少しずつ光を帯びていく。僕は一度目を閉じる。体が少しずつ燃えていくを感じる。そして、その感覚は少しずつ消えていく。

聞きなれた機械的な音楽が鳴り響く。仕方なく僕は目を開ける。

・・・勘弁してほしいな。夢落ちなんて。・・・ふう。あまり夜空にばかり想いを馳せるもんじゃないな。

嘘の様な本当の夢。いや、実際は目を開けて相当安心したんですが。ね。つって。

第26話【世界の終わり。その一例。】（後書き）

実際、本当に怖かったわけですが。単なる夢をここに書くのも・・・
まあ、ありですかね。

第27話【創造の森】

【創造の森】

私は想うことができる。この広くあまりにも明らかでない宇宙の片隅で。私は様々な物を創造し、構築することができる。想うことは師。

暗い森の中を彷徨う。誰もいない森。月明かりだけが頼りの、闇に沈む静かな森。

私の師は問う。

「何故、夜の森は気味が悪いと思う？」

私は困惑する。

「わかりません。暗く、冷たいからでしょうか？」

師はさらに問う。

「君は木々を生き物だと思ukai？」

私は答える。

「生きているとは思いますが。ほら、また一つ葉っぱが落ちてきました。ふわり、ふわりと。私の体も、日々細胞が生まれ変わります。ですから、同じ様に生きていると、そう思います。」

師は静かに語る。

「そうだ。生きている。だが、この木々が何かを考え、我々と同じく創造しているとまで意識が及ぶかい？」

また、私は答える。

「いえ、そんな気はしますが、確信を持ってません。会話もできませんし。ただ、物質的にも酸素を与えてくれる様に。我々に沢山の物を与えてくれるものではあると思っています。」

姿のない師は、恐らくにこりとして口を開く。

「そう、与えてくれる。その枝を広げた姿は大きな人間にも見えるし、なにより生きるための新鮮な酸素を与えてくれる。人間の出した二酸化炭素を良質な酸素にしてくれるのだ。」

私にもこりとして答える。

「そういう意味では語ることはできずとも、我々は持ちつ持たれつなのですね。」

師は悪戯な空気を纏い問う。

「では、無口な人間をどう感じる？何を考えているかわからないくらい、静かで表情のない人間を。」

私は首を傾げ、少し考えてから答える。

「言い方は悪いかもしれませんが、気味が悪いかもしれません。」

確かに生きているのに、死んでいる様で……。」

師は繰り返す。

「では、何故夜の森は気味が悪い？」

私はまた、困惑する。

「わかりません……。」

師は大きく呼吸をして、口を開く。

「それは、夜の森が二酸化炭素を吐くからさ。人間と同じように呼吸が動物になるからさ。まるで何かを考えているかの様に。そして実際、彼らは何かを考えているのさ。静かに呼吸しながら。だからもし、君の創造が枯渴した時はこの気味の悪い夜の森で恐れ傷つきなさい。そうすれば君の創造の泉は満たされるだろう。痛みに伴わない人の感情、創造に。何かを伝える力はないのだから。」

第27話「創造の森」 （後書き）

宇宙の中で、我々は小さな点になるのも難しい。ですが、我々の心の中には時に宇宙をも超える何かになれるのではないかと、そう強く思うのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9900i/>

出口のない考察

2011年1月12日01時01分発行